

〈メソアメリカに於けるシンボルの諸体系〉

狩 野 千 秋

はじめに

マヤの象形文字に関する研究は、依然として混迷状態を続けてはいるものの、少なくとも暦と数字に関連する部分は、可成り解明も進んできている。他方、解読作業とは別に、マヤをはじめとするメソアメリカの古代芸術に於けるイコノグラフィ―研究の進展する過程で、マヤ文字を構成する諸要素のうち、いくつかのものは、すでに先古典期から原古典期にかけて製作された石碑や絵画の中にその原型の存在することが判明してきた¹⁾。それらはいずれも神々の図像に伴うシンボルとして出現したもので、当初はオルメカによって考案され、その後、各地へ広まったものと推定される。

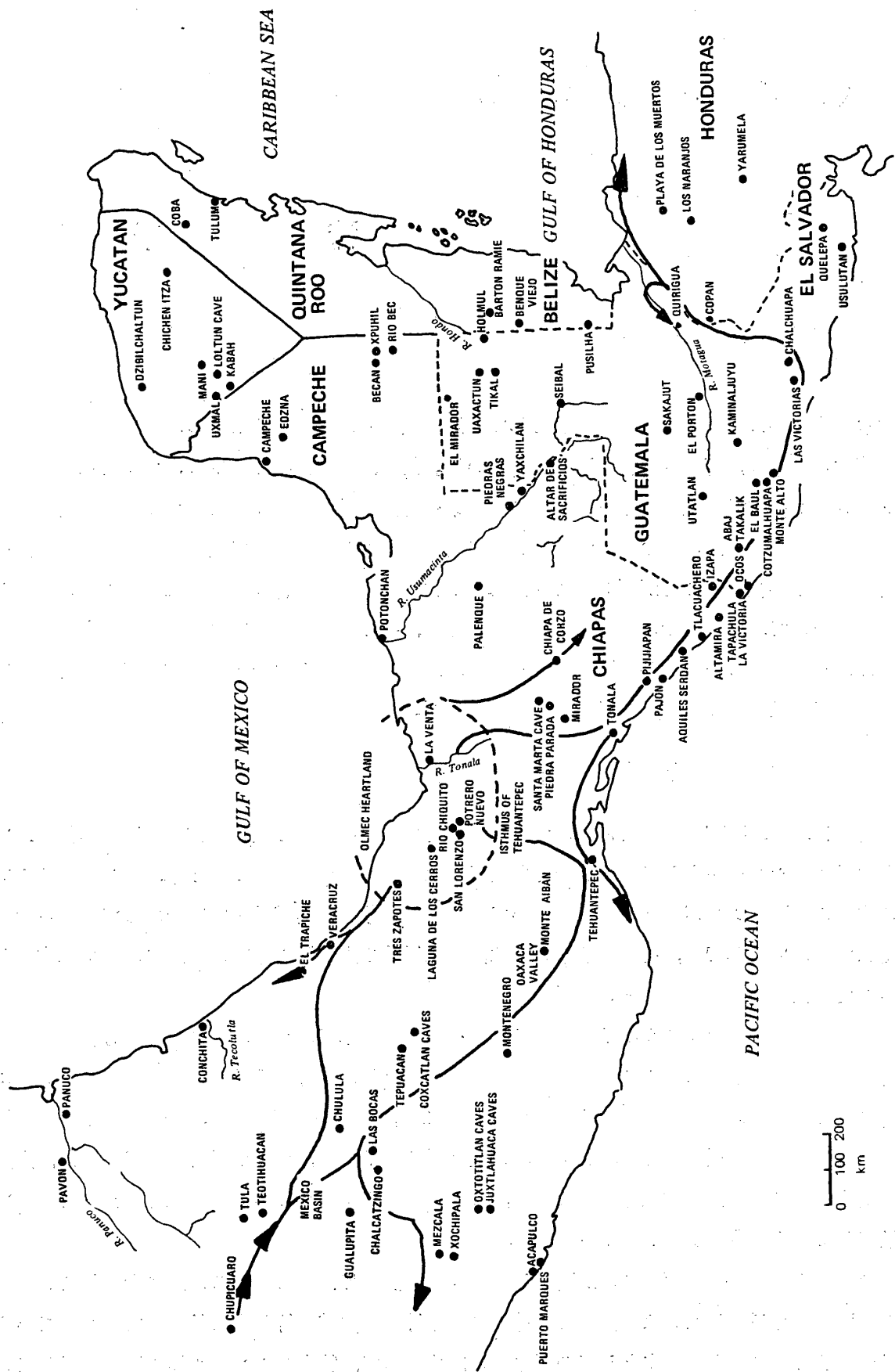
本稿は、シンボルの発生から伝播していく過程、ならびにそれらの種類と構成、意味などについて、主として図像学的な見地から考察したものである。

I) シンボルの発生と伝播

マヤでは日、月、時間、数字などは、すべて神聖視され、それらの表記は神々の図像を伴い、いずれも宗教的なシンボルとしての性格をそなえていた (Thompson 1960, 1972)。メソアメリカに於ける文字の発達とシンボルとの関係については、未だ十分に資料が整っていないので、はっきりと断定はできないにしても、そのような観念は、マヤ以前の土着民の思想のなかに、すでに古くから存在していたものと考えられる。

P. D. Joralemon はオルメカのイコノグラフィ―研究を通じて、マヤ、アステカの万神殿に祀られた神々の大半は、すでにオルメカの時代から出現するとし、特殊な図像表現や付随するシンボルを基準に、神々の種類を分類している (Joralemon 1971, pp. 35-91)²⁾。M. Coe もこの説を支持し、また後述するU字型、花卉型、X字型、菱型などのサインは、マヤの場合と同じように、太陽、月、金星その他の星を表わす天体記号であり、暦の体系もオルメカによって発明されたのではないかと推定している (Coe 1977, pp. 186-190)。

上記の説にはもちろん問題もあるが³⁾、しかしマヤの芸術では象形文字のなかに含まれている幾つかの重要な記号が、しばしば単独な形で神々の像や神官の衣裳、持ち物に付随して現われている。この場合は明らかに暦とか碑文としての文脈からは分離して、特定のシンボルの機能を果してい



地図 I メソアメリカの主要遺跡ならびにオルメカ文化の伝播経路図

＜メソアメリカに於けるシンボルの諸体系＞

だものと考えられるが、そのような図像学上の特徴は、正しくオルメカ様式の伝統を踏襲したもので、中間の諸文化、とくにイサパ様式を通じてマヤに継承されたと推定されるのである。

いずれにしても、メソアメリカに於ける文字の生れる以前の段階で、宗教的な意味合いをもつシンボルが発生してくるが、それは当初オルメカによって考案されたもので、神々の属性や職能を表象し、同時に個々の神を識別するための手段として用いられたようである。

かくして発生したシンボルは、オルメカ文化の伝播と共に各地に波及していくが、オルメカ本来の拠点は、トゥストラス (Tuxtla), ベラクルス, 西タバスコ諸州を含むメキシコ湾岸地帯にあったと考えられる。その理由は、サン・ロレンソ (San Lorenzo), ラ・ベンタ (La Venta), リオ・チキート (Rio Chiquito), プエルト・ヌエボ (Puerto Nuevo), トレス・サポテス (Tres Zapotes), ラグーナ・デ・ロス・セーロス (Laguna de Los Cerros) などの大祭祀センターは、いずれもこの領域内に集結しており、また純粋な意味でのオルメカ様式は、この地域内のみ存在し、更にこの中核地帯から時間的にも空間的にも遠ざかるにつれて、その特徴は稀薄となる傾向を示しているからである。

しかしながら、いわゆるオルメカ的な特性を具えたさまざまな亜種、とくに小型の石彫や奉獻斧、仮面、装飾石板、管玉、ペンダント、石偶、土偶、などのような運搬可能な製品は、驚くほど広大な地域に分布している。即ち、北方はメキシコ中央高原地帯からモレーロス、ゲレーロ、オアハカ地方にかけて、南方はチアパスからグアテマラの太平洋岸へと下り、エル・サルバドール地帯にまで及んでいる (Coe 1965b; Flannery 1968a; Grove 1968b; Porter 1981)。

従来、この種のオルメカ式物品の拡散現象は、専ら宗教的な信仰の普及に伴うものとの解釈が有力視されていたが、近年に於ける発掘調査の進展と、共伴するデータの検証から、当時の交易組織の発達とも密接に関連のあることが判明してきた (Pires-Ferreira and Flannery 1976)⁴⁾。交易の促進には種々の要因が作用したものと想像されるが、オルメカの場合には、宗教儀式や祭祀用の器物に必要な原材、たとえばヒスイ、蛇紋岩、黒耀石、赤鉄鉱、磁鉄鉱などは自国内にあまり産出しないので、またとくに上部階層のなかには、自己の権力や特権の標章である鏡や石斧の原材を、是非とも獲得したいという強い欲求が働いていたものと推定される⁵⁾。

いっぽう、大型の石碑や石彫類は、主にオルメカの本拠地で多く製作されているけれども、モレーロス州のチャルカツィンゴ (Chalcatzingo), ゲレーロ州のオストティトラン (Oxtotitlan), チアパス州のパードレ・ピエドラ (Padre Piedra), 更にグアテマラのサン・イシドロ・ピエドラ・パラダ (San Isidro Piedra Parada) からエル・サルバドールのチャルチュアパ (Chalchuapa) へと交易ルートに沿って、点々と発見されている。大型の石碑を建立してある地点は、おそらくオルメカの交易上の根拠地で、アステカの“飛び領地”的な性格をもち、オルメカの商人たちもアステカ時代のポチテカ (外国貿易専従者) と同じように軍事組織をもって、遠距離交易に従事していた可能性がある。というのは、本国から離れた異国の地に建てられている石碑の主題には圧倒的に軍事や戦闘の情景が多く、中核地帯の宗教や神話的モチーフとは明らかに対照をなしている

からである。しかしこれらの地域のいずれの場所にもオルメカの隊商軍人は居住して、洞窟とかしかるべき場所で、固有の神々の祭祀を行ない、独特の象徴主義的な芸術様式を広めていったと考えられる。

Ⅱ) オルメカ様式の編年的位置

上述したように、オルメカの遺物はメソアメリカの広汎な地域にわたって分布するものの、個々の資料については、大半のものが的確な情報を欠いており、また実際に調査の行なわれたところですら、年代的には極めて曖昧な状況に置かれていた⁹⁾。しかし幸いにも最近の活発な発掘調査によって、新たに確実な情報が提供されているので、直接シンボルの問題に触れるまえに、各地に於けるオルメカ文化の影響の度合や、編年的位置について確認しておくことにしたい。

まずオルメカ固有の文化は、本拠地であるメキシコ湾岸地帯において、サン・ロレンソ相(1200—900B. C.)、ラ・ベスタ相(900—400B. C.)、トレス・サポテス相(400B. C.—100A. D.)の三期に区分されている(Coe 1977, Porter Weaver 1981)。このうちオルメカの要素の伝播、拡大するのは前の二つの文化相で、最後の相はむしろ衰退期で、外部からの文化導入が認められる。次に地域別に要点のみ列挙してみよう。

メキシコ中央高原地帯 ソアピルコ(Zohapilco)とトラパコヤ(Tlapacoya)地域の調査(Niederberger 1976)ならびにイスタパルカ(Ixtapaluca)、コアペスコ(Coapexco)地域の調査(Tolstoy 1975; Tolstoy et al. 1977)によって、1500B. C.以降に於ける河谷地帯の編年体系が整えられた。オルメカの要素はすでに形成期初期のイスタパルカ相(1400—800B. C.)から出現し、アヨトラ(Ayotla)相(1250—1000B. C.)では平底鉢や無頸壺に様式化されたジャガーの爪、眉毛、X字型文様、渦文がみられ、またD-1型、D-2型などオルメカ式土偶も出土している(図1, 2参照)。またコアペスコ相(1150—1100B. C.)に於ても、サン・ロレンソと強い関連性をもつ土器複合の存在が認められる。アヨトラとマナンティアル(Manantial, 1000—800B. C.)相からもオルメカの幼児をかたどった大型中空土偶が出土しており、このほかブエブラのラス・ポーカス発見の幼児の粘土座像もやはりこの時期のものと判断される。いずれにしても、これらの地域に出現するオルメカの要素は、サン・ロレンソ相にほぼ対応するものと考えられる。

トラティルコの遺跡はすでに1940—50年代に発掘され(Piña Chan 1958; Porter 1953)、多大な成果を収めたが、更に最近の調査(Tolstoy and Paradis 1970, 1971)によって新たに情報が付け加えられた。トラティルコの墳墓からは南米のチャビン式に似た鏡型注口壺が発見されて注目を集めたが、全般的にみると、この地域の墳墓に副葬されている土器類は、イスタパルカ相からサカテシコ相(800—400B. C.)にかけての時期に相当する。このうちとくにオルメカの要素は、アヨトラ相に属する平底鉢や注口付皿形土器の文様に顕著で、ジャガーの各部分を様式化した幾何的デザインやシンボル・マークがあり、またD-1, D-3, D-4型のオルメカ式土偶も多数出土している。要約すると、メキシコ河谷地帯にオルメカの要素が出現するのは、イスタパルカ相の期間内に

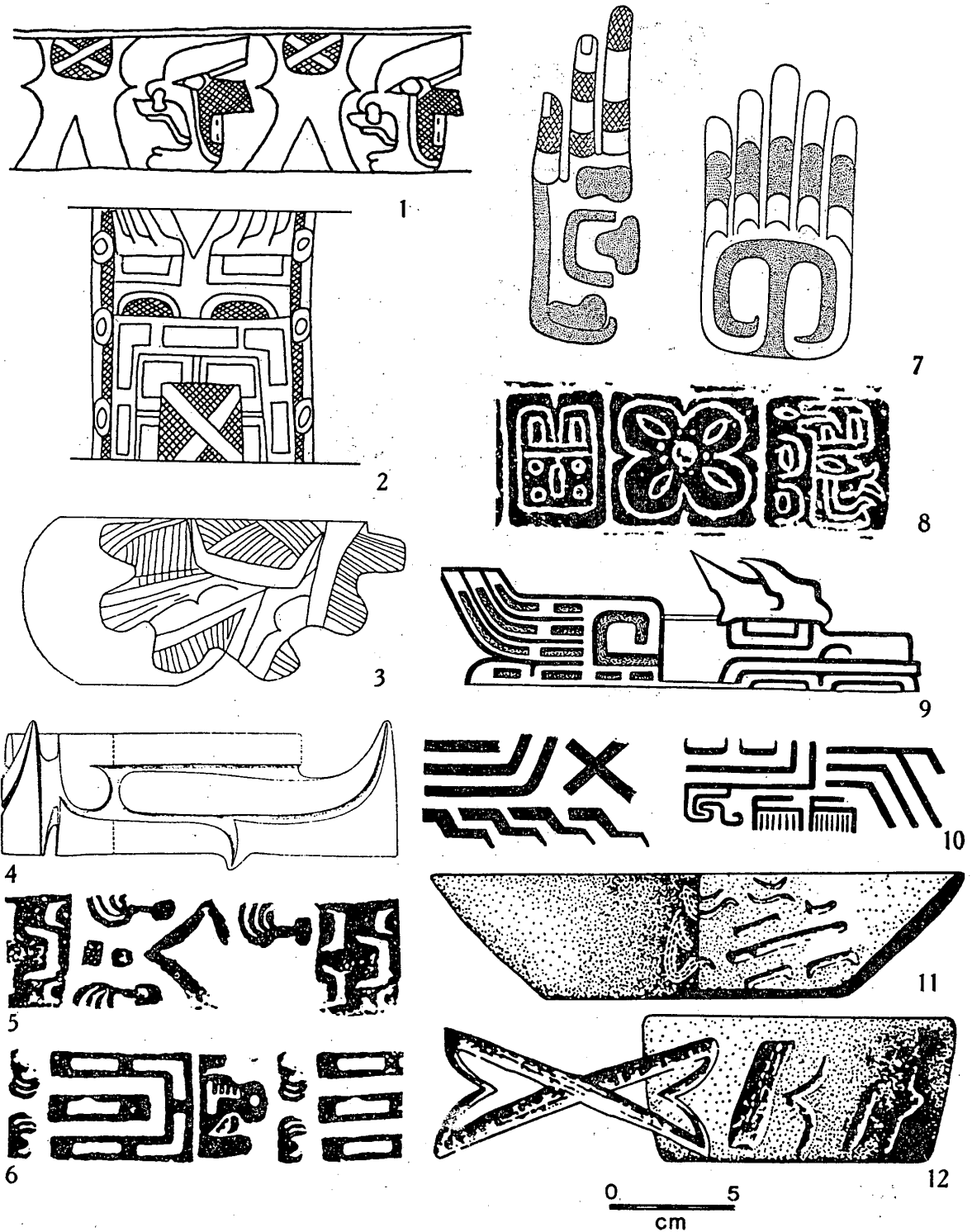


図1

1. トラパコヤの土器(Joralemon 1971, Fig.237)
2. トラパコヤの土器(Idem. Fig.120)
3. ラス・ボーカスの土器(Coe 1965a, Fig.24)
4. ラス・ボーカスの印章(Idem. Fig.173)
5. ラス・ボーカスの印章(Joralemon 1971, Fig.134)
6. ラス・ボーカスの印章(Idem. Fig.129)

7. トラティルゴの玉器(Covarrubias 1957, Fig.10)
8. トラティルゴの印章(Joralemon 1971, Fig.135)
- 9.10. トラティルゴの土器(Covarrubias 1957, Fig.9)
- 11.12. サン・ホセ・モゴータの土器(Pyne 1976, Fig.9.8-a, b)

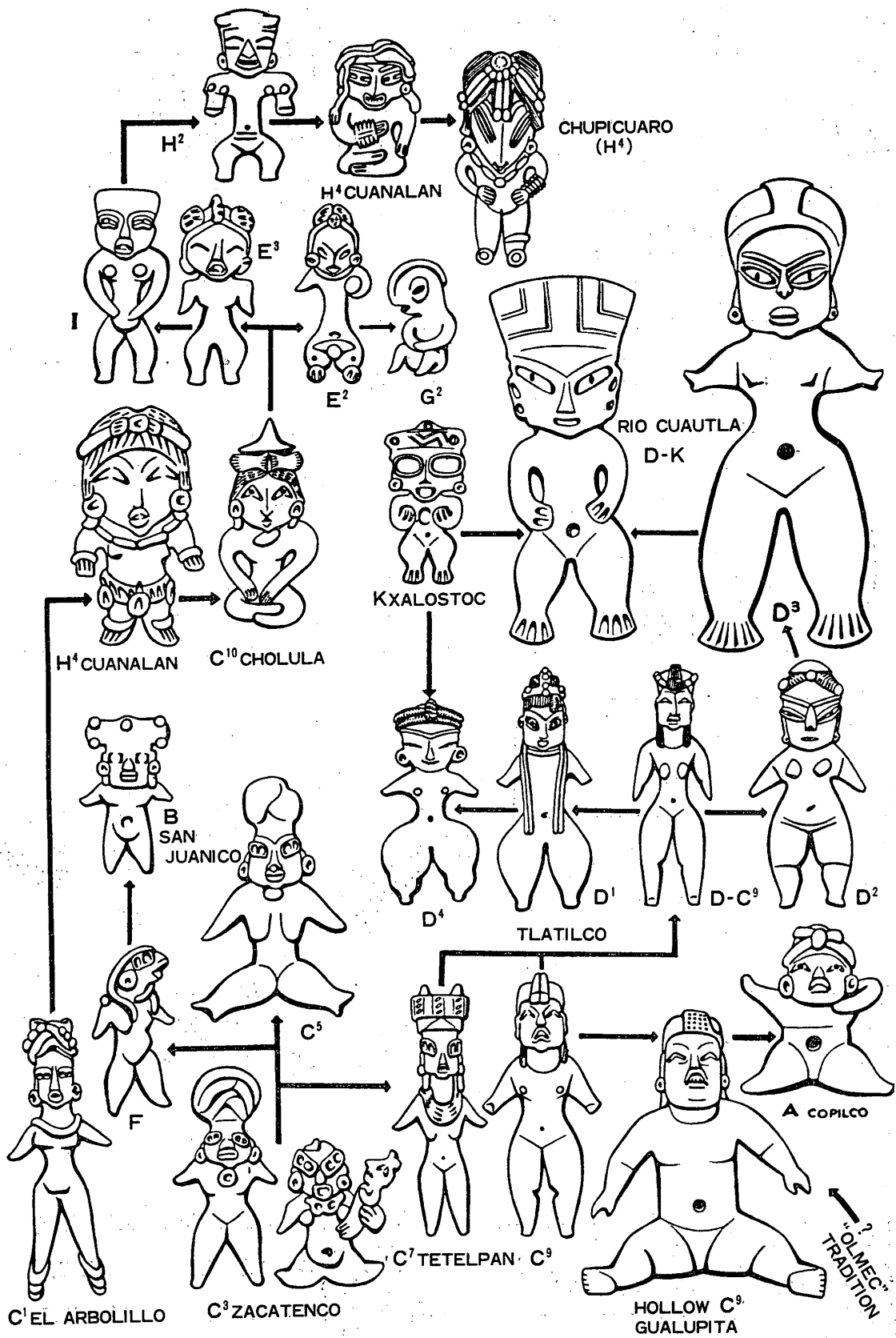


図2 先古典期の土偶分類図(Covarrubias 1957, Fig.8)

＜メソアメリカに於けるシンボルの諸体系＞

相当し、そのうちアヨトラとコアペスコの両重相は、サン・ロレンソ相と様式的な特徴を共有し、マナンティアル相はラ・ベータ相に対応しているといえよう。

メキシコ河谷に於けるオルメカ文化の影響は、とくに土器の器形や文様に、また幼児型土偶などに顕著に認められる。しかしこの地方にはオルメカ様式の石彫や記念石碑の類は発見されていない。したがってその影響力もさほど強くなく、間接的で、ジャガー神の祭祀そのものが行なわれたかどうかは確かではない。

モレーロス地方 ラス・ボカス (Las Bocas) の遺跡はオルメカ文化に属するもので、中空の幼児型土偶や黒色土器の文様に、オルメカ特有のジャガーの爪と手の削りとり文様がみられる (図 1—4)。

この地方で最も重要なオルメカの遺跡は、チャルカツィンゴで高原地帯では唯一のオルメカ式の浮き彫り像が存在する (Grove 1968a)。この場所は当時の宗教的な祭祀センターであったばかりでなく、通商交易路の要所としての役割をも果たしていたと推定される。浮き彫りは幾つかのグループをなし、農耕や豊饒、雨などに関連のあるもの、また戦闘の情景など軍事的な色彩を帯びた主題などに分かれ、図柄には人物像、渦巻き、雲、水滴、火焰型の眉毛など、いずれも純粋なオルメカ様式で表現されている (図 4—13)。

チャルカツィンゴはその地理的な位置からみて、南はゲレーロ、北はメキシコ河谷、南東はオルメカの本拠地であった湾岸地帯の三つの交易路を統御していたと考えられる。

チャルカツィンゴでは発掘調査の結果 (Grove et al. 1976)、形成期の前期から後期にかけての三つの文化の様相が識別される。

最古の文化はアマテ (Amate) 相で約 1500B. C. に相当し、小規模な村落址で道具類には黒燧石の石器類が多く使用されている。

第2の段階はバランカ (Barranca) 相で、ほぼ 1100B. C.—700B. C. ころの期間に相当し、年代的にはサン・ロレンソ相に対応する。上述のオルメカ様式の浮き彫り像は、この時代に製作されはじめたと推定されている (Grove et al. 1976, p. 185)。またこの時期に属するサン・パブロ (San Pablo) 式土器にもオルメカ式のデザインがあり、またトラティルコ出土の土器類との類似性も認められる。

チャルカツィンゴの最後の文化は、カンテラ (Cantera, 700—550B. C.) 相でモレーロス地方に於ける形成期文化の最盛期に相当する。“飛翔するオルメカ人”と呼ばれる浮き彫り像は、ラ・ベータ様式の人物像に酷似している。このほか18個の石塊で構築された大型の祭壇もオルメカ式と考えられている。

ゲレーロ地方 アカプルコ近郊のプエルト・マルケス (Puerto Marques) では、明らかに形成期の系統に属する土器や土偶が発見されている (C. Brush 1969; E. Brush 1968)。初期のものはテワカン谷のプロン (Purron) 式土器に類似しているが、これに続いてオルメカ式の幼児像が出土する。そしてこの種の土偶は中期形成期を通じて、沿岸地帯に広汎な分布をみる。

現在のところ、オルメカ式の運搬可能な小型の石製品、即ち仮面、石偶、奉献斧、石板などは、ゲレーロ地方からの発見例が最も多い。チルパンシンゴ (Chilpancingo) 周辺にあるフストラワカ (Juxtlahuaca) とオストティトランの洞窟には、見事なオルメカ様式の壁画が遺存しており、この点からオルメカ人は単に原材を採取したばかりでなく、実際にこの地方に住んで、彼ら固有の宗教祭祀を営んでいたと推測されるのである。

フストラワカの岩壁画 (Gay 1967) の中には、今から 6000 年前に遡る新大陸でも最古の部類に属するものも含まれている。オルメカ式の壁画は、山中の奥深い洞窟内であって、儀式用の衣裳をまとい、ケツァル鳥の羽根飾りをつけた高位の人物を描いたもので、赤、黒、緑、黄などの多彩色が用いられている。このほかヘビとかジャガーをモチーフにした壁画もある。

オストティトラン (Grove 1970) では洞窟の入口それ自体の箇処に、ジャガーの頭部に座した人物像が描かれ、それに豊饒、雨、水、神話的モチーフなどが付随している。ジャガーの大きく開いた口をもって洞窟を象徴する方法は、チャルカツィンゴの浮き彫り像にもみられるが、それはオルメカの始祖神話と関連があるらしく、ラ・ベンタの記念碑や祭壇にも同種のテーマはよく表象されている。洞窟の内部には黒、赤などの多彩色で写実的なジャガー像、幼児像、会話を表わす渦巻き状の文様などが描かれている。

フストラワカの壁画の年代はサン・ロレンソ期に、またオストティトランの壁画はややおそく、ラ・ベンタに並行する時期であろうと推定されている (Coe 1977, pp.184—189)。

このほかバルサス川中流地域のサン・ミゲル・アムコ (San Miguel Amuco) でもオルメカ式の人物石彫がみつまっている (Grove and Paradis 1971)。またチルパンシンゴ北方のメスカラ (Mezcala) とかショチパラ (Xochipara) 地域からも、形成期の前期から中期にかけての土器やオルメカ式の小型石彫、土偶などが多数発見されている (Gay 1972; Griffin 1972)。

オアハカ地方 最古の村落址はエトラ (Etla) 谷のティエラス・ラルガス (Tierras Largas, 1500—1200B. C.) の遺跡に集中している。これに続くサン・ホセ (San José, 1200—900B. C.) 相はオルメカのサン・ロレンソ相に対応する時代で、土器の文様にオルメカ的な要素があり、また C 型、D 型の土偶も出土し (Flannery et al. 1967; Blanton et al. 1981)、両地域間に交流のあったことがわかる。オアハカ地方は鏡の原材である鉄鉱石の産地であるため、早くからメキシコ湾岸地帯との交易が活発に行われたようである (Flannery 1968)。

グァダルーペ (Guadalupe, 900—700B. C.) 相に入るとオルメカとの接触は急速に後退し、ロサリオ (Rosario, 700—500B. C.) 相になるとオアハカ河谷地帯には多くの小首長国が発生し、サン・ホセ・モゴータに最初の公共的祭祀センターが設立されるが、オルメカの影響は全般に影をひそめる (Blanton et al. 1981, pp.63—66)。

他方、モンテ・アルバン (Monte Albán) の遺跡では I 期の (500—350B. C.) 相に属する石碑 (Caso 1965a) とか祭祀用の大型土器 (Paddock 1970) にオルメカの影響が認められるが、それについてはシンボルの項で述べることにする。

チアパス—グアテマラの太平洋岸低地、山麓地帯 この地帯にはすでに 2500—1500B. C. にオコス (Ocos), クワドロス (Cuadros) などの文化が存在していたが、1000B. C. ころからオルメカ文化の影響が現われてくる。当時、メキシコ湾岸と太平洋岸とを結ぶ交易路が設けられ、チアパス州のミラドール (Mirador), ミラマール (Miramar), サン・インドロなどの諸遺跡は、この交易ルートに沿ったオルメカの宿駅であったと見做されている。トナラのツツクリ (Tzutzuculi) の遺跡からはオルメカ式のジャガー人間の像やドラゴンの像が、ピラミッドの階段に刻まれている。但し年代的にはやや新しく 410B. C. と推定されている (McDonald 1977)。

チアパ・デ・コルソ (Chiapa de Corzo) とサン・インドロは粘土の張り床の基壇や玉石を積んだ露台の存在からみて、オルメカ初期の地方的祭祀センターであったと考えられる (Lowe 1962)。ピエドラ・パラダとピヒヒアパン (Pijijiapan) にもオルメカ様式の石碑をもつ小規模な遺跡があるが、祭祀センターというより、祠堂といった施設に近い。年代はサン・ロレンソ相に比定されている (Navarrete 1960, 1974a)。

太平洋岸のイサパにも古い時期の建築遺構があり、チアパ・デ・コルソと関連のある土器が出土している。年代はデウンデ (Deunde) 相に属し、1600—700B. C. ころと推定されている (Ekholm 1967)。イサパには中庭や広場をめぐって配置された神殿ピラミッドが80基ほどあり、当時の巨大な生活活動の中心地であった。その独特のイコノグラフィは非常に複雑な宗教祭祀の存在を想定させるが約 250 基の祭壇、石碑、石彫があり“長い唇の神”の像には、後述するようにU字型、X字型など、オルメカのシンボルと同系統の記号が付されている。

グアテマラのレタルウェレウ県 (Retalhuleu) にあるアバフ・タカリク (Abaj Takalik) ではオルメカとマヤの両方の石彫が発見されている (Graham 1977)。ここでは自然の岩石に彫刻を施したものからはじまり、自然主義的な丸彫りへと進み、ついでオルメカ様式が出現してくる。記念碑23号は、メキシコ湾岸のオルメカ式の巨石頭像が再加工されて製作されている。このほかオルメカ式彫刻のほとんど全範囲がアバフ・タカリクでは見出される。年代は先古典期の後期のものが多い。

モンテ・アルト (Monte Alto) の遺跡からもオルメカ式の巨石頭像が発見されており、年代は 500B. C. 以降の先古典期後期に編入されている。この種の巨大な丸い岩石の彫刻類の分布は非常に広く、高地はビルバオ (Bilbao) からウタトラン (Utatlan), カミナルフユ (Kaminaljuyú) へ、また南はコパン (Copán) からホンデュラス方面へと拡がっている (Parsons and Jenson 1965)。

モンテ・アルトの西方 9km の地点にエル・バルサモ (El Balsamo) の遺跡があり、豊富な土器資料によって、石彫の編年を行なうのに役立っている。この地域の文化はモンテ・アルトと多くの特徴を共有し、期間は1150—200B. C. の範囲にわたっている (Shook and Hatch 1978)。

高地マヤ地域 グアテマラ市近郊のカミナルフユは先古典期から古典期を通じての大祭祀センターとして発達をとげたが、先古典期の後期のミラフローレス相 (Miraflores) ではイサパ様式の石碑が製作されるようになった。ジャガーとヘビとを混合した“長い唇の神”の像は明らかにオルメ

カ様式の系統に連なる (Covarrubias 1957, Fig. 22)。

このほかワシャクトゥン (Uaxactún) の「E-VII 下層式」ピラミッドの装飾仮面にもオルメカ様式との密接な関連性が認められる (Kidder et al. 1946)。

エル・サルバドール東部高原のチャルチュアールには先古典期中頃 (900—650B. C.) にオルメカ文化が波及してくる。この地はオルメカの軍事上の前哨基地で、また鉄鉱石、黒燐石、カカオなどを採取したようである。オルメカ式の土器やヒスイ、蛇紋岩の石偶、石斧などが多くの地点で発見されている。エル・トラピチェ (El Trapiche) の E-III-1, 2 の巨大なピラミッドはこの時期に属し、メソアメリカでも当時のものとしては最古の建物の一つに数えられる (Sharer 1978b)。

以上、オルメカ文化の各地に波及した年代は、およそ1200—400B. C. くらいの期間にわたっていたことがわかる。またその影響の度合も地域によってかなり異なっていたことがわかる。

Ⅲ) シンボルの種類と構成

オルメカの初期の図像のテーマとしては、ジャガーと人間とが混合した、いわゆるジャガー人間像 (Were-Jaguar) が主流を占めているけれども、部分的には、ヘビ、ワニ、コンドルあるいは熱帯の鳥類の特徴を示す図柄も混入している⁷⁾。イサパ、サポテカ、マヤへと進展する過程で、主神の座は猫科動物から次第に爬虫類へと移行する傾向を示しているけれども、それらは独立した神格をもちながらも、図像的には、種々の特性が複雑に絡みあっている。またそれはシンボルの面にも現われて、同一のシンボルが、さまざまな種類の神に重複してみられる。

シンボルのテーマ、あるいは対象をなすものは、一般に動物や植物が多いけれども、雨、水、火、風、雷、嵐、などの自然の諸力や現象、天と地、夜と昼、太陽、月、金星、その他の天体の星、そのほかヒスイと高貴、貴重、水、緑などを一種の観念連合によって互に関連づけることも行なわれている。このほかシンボルには神話上の諸々のテーマも含まれている。

シンボルの形態それ自身は、時代と共に少しずつ変化するものの、基本的な構成原理はすでにオルメカの時代に整えられていた。即ち、具象的な図像をまず構成要素に分解し、各部分を抽象化して記号的な性格をもつ独立した文様へと転換する。次にそのようにして創り出された単独の要素を2, 3種類ずつ組み合わせることによって、新たに別個の合成文様あるいは記号が案出される。この手法は、南米のチャビン式のデザイン構成法とも共通の面が認められる (Kano 1979, 狩野 1979)。

1 オルメカのシンボル

通常の装飾文様とは異なる特殊な記号で、明らかにシンボルと判定し得るものは、巨石頭像、記念石碑、祭壇、岩壁の浮き彫り、小型彫像、仮面、奉献用石斧、石偶、土器その他儀式用の器物などに付随して現われている。

1) U字型

これには単独型と合成型の二種があり、更に曲線的、直線的など形態的にも変化がある。

<メソアメリカに於けるシンボルの諸体系>

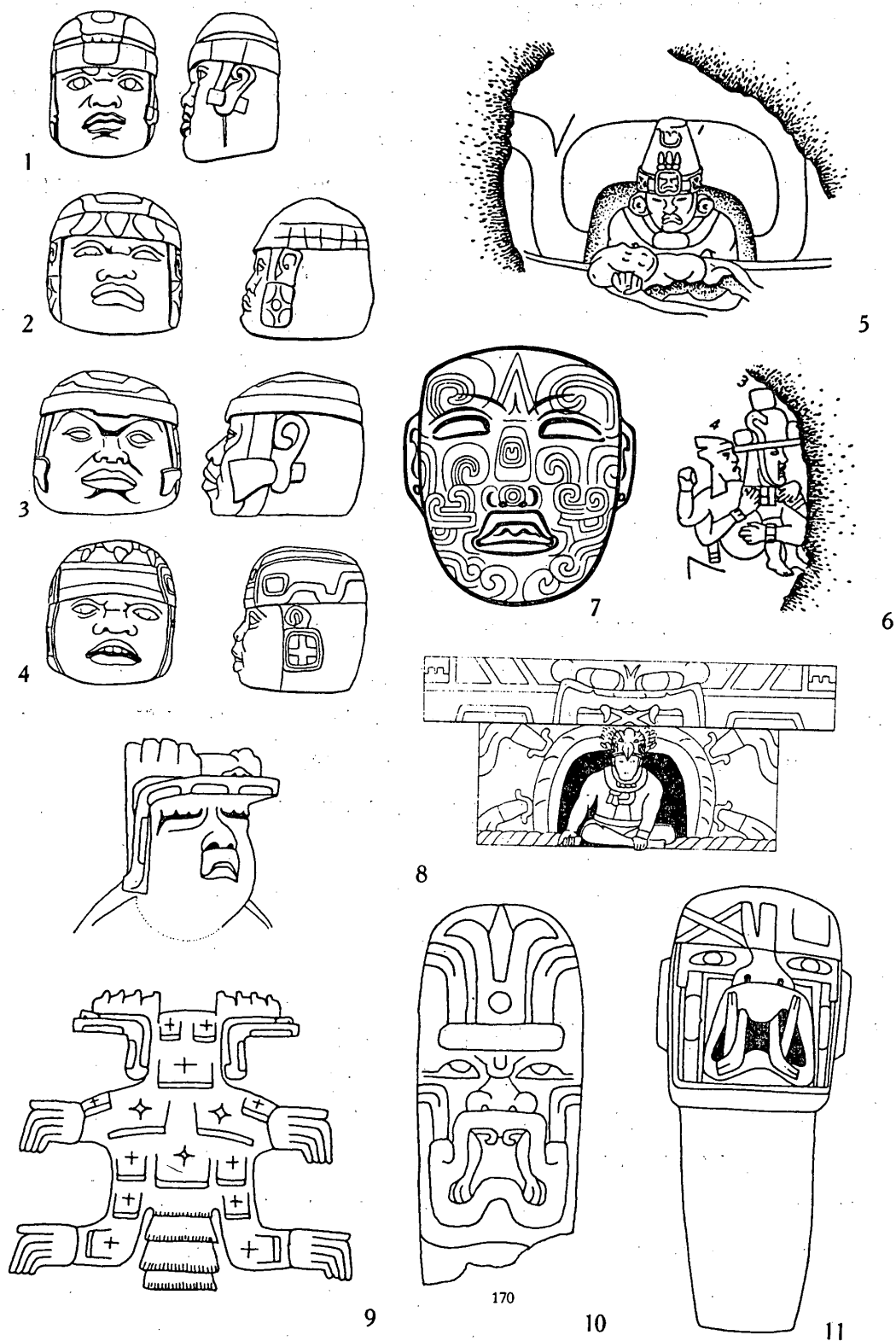


図3

- 1. サン・ロレンソの巨石頭像1号(Wicke 19)
- 2. ラ・ベントの巨石頭像1号(Idem, Fig.30)
- 3. トレス・サボラス巨石頭像2号(Idem, Fig.30)
- 4. ラ・ベント巨石頭像4号(Idem, Fig.30)
- 5,6. ラ・ベント祭壇5号(Drucker 1952, Fig.52)

- 7. 仮面(Covarrubias 1957, Fig.35)
- 8. ラ・ベント祭壇4号(Schävelzon 1980, Fig.2)
- 9. 土偶(Covarrubias 1957, Fig.26)
- 10. 石斧(Covarrubias 1957, Fig.34)
- 11. 石斧(Covarrubias 1957, Pl.XVI)

(i) 単独型 大型のものは上部が左右に開き、先端が外側に彎曲する型が多く、ラ・ベント1号、トレス・サポテス2号などのように、巨石頭像のヘルメットに付されたものが典型的な例である(図3—2~3, 表I—2, 7)。またラ・ベントの祭壇5号には、首長か神官らしい人物が、ジャガー幼児を抱えて洞窟から出現する姿を表現した彫像が刻まれているが、この場合、U字型は洞窟の入口の箇所を大きく縁取っている(図3—5)。この彫刻はオルメカ族の出自を語る神話をテーマとしたものと考えられる。

小型の曲線的U字型は、フンボルトと称する奉獻石斧に刻まれた一連の絵文字の中の、最下段にもみられる(図6—1)。直線的なものは、トラティルコやラス・ポカス出土の土器装飾や印章模様の中に認められる。ラス・ポカス出土の印章(図1—5, 表I—10)では先端の尖ったU字型が一つの区画の中に5個ほどまとめて配置されている。扁平で小形のものは、後にイサパやマヤの図像様式に伴ってよく出現するようになる。

文字通りU字型のシンボルは、石斧型のジャガー人間像の額の箇所にX字型と一対をなして表現されたり(図3—11)、また方形の枠の中に収められたり(図4—1)、また周囲を2重に囲んで仮面の鼻の中央部に配したものもある(図3—7)。

(ii) 合成型 上記のU字型を基本として、その中にX字型、十字型、星型、円などを配したり、また後述するV字型や様式化された植物文様と組合わされて、別個のシンボルが合成される。十字型や星型との合成はモレーロス州のアトリワヤン(Atlihuayan)発見の土偶に好例がある(図3—9)。またトラティルコの土器にはT字型と合成された文様がある(図1—7)。

X字型や円との合成型は、よくジャガー人間の仮面の額の眼の箇所に置かれ、しかも両者は一対をなす場合が多い(図4—2, 6—5)。このようなシンボルの配置には特殊な意図があるものと判断される。このほか出所不明の石斧ではあるが、ジャガー神の頭飾りにU字型とウモロコシの穂、ジャガーの牙、水を表わす小円などを組合わせて、単独のシンボルとした例もある(図3—10)。

2) X字型

一般には聖アンデレの十字とか斜交十字型とも呼ばれている。このシンボルは上述したように、よくU字型と結びついて現われているが、付随する位置は彫像の額や眼、口の中、胴部また胸飾り、頭飾りの中と大体に於て一定している。眼の中にあるものとしては、ラグーナ・デ・ロス・セーロスのジャガーの石頭像1号(図4—3)、ラス・リマス像に刻まれた神像(図4—4)、サン・ロレンソの記念碑30号(図4—5)、ゲレーロ州のフストラワカの壁画2号の翼蛇(Gay 1976, p.30)、その他に例がある。口中に配置されている例としては、ラ・ベントの祭壇4号のジャガー神(図3—8)、トラパコヤ出土の様式化されたジャガーの口(図1—2)がある。チャルカツィンゴやオストティトランの岩絵では翼蛇あるいは竜を想わせる図像の胴部や翼の箇所にある(図4—6, 7)。トラティルコ、サン・ホセ・モゴータの土器にもやはり翼蛇を抽象化した模様と一緒に描かれている(図1—10, 12)。小型のジャガー人間像の額の帯飾りや首飾り、胸飾りの場合には方形の枠の中や、また水流を図案化したジグザグ模様を伴っている(図4—8~10)。ラ・ベントの石

＜メソアメリカに於けるシンボルの諸体系＞

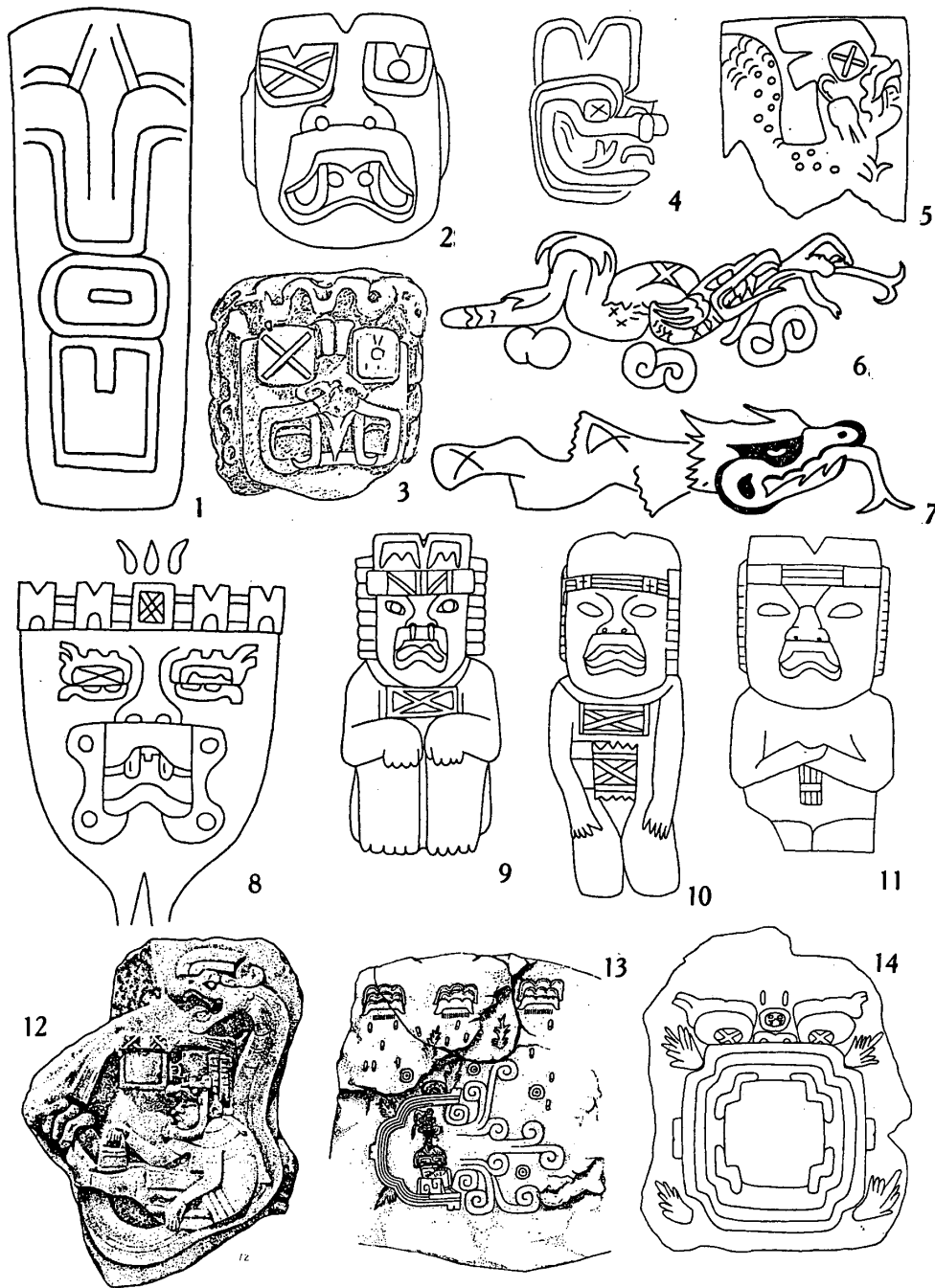


図 4

1. 石斧 (Indigenous Art of the Americas 1947, Pl.47)
2. 仮面 (Joralemon 1971, Fig.153)
3. ラグーナ・デ・ロス・セロスの石頭像 1号 (Bernal 1969, Pl.12)
4. ラス・リマスの石偶側面像 (Coe 1972, Fig.4-c)
5. サン・ロレンソ石碑30号 (Coe 1967C, Fig.9)
6. チャルカツィンゴ浮き彫り 5号 (Cook de Leonard 1967, Fig.4)
7. オシエトティトランの壁画1-c (Joralemon 1971, Fig.243)
8. ロス・トゥストラスの石斧 (Piña Chan and Covarrubias 1964, Fig.1)
9. サン・ロレンソ石彫52号 (Joralemon 1971, Fig.211)
10. ラス・リマスの石偶 (部分) (Idem, Fig.206)
11. 石斧 (Idem, Fig.214)
13. ラ・ベンタの石碑19号 (Drucker et al 1959, Fig.55)
13. チャルカツィンゴの浮き彫り 1号 (Coe 1965a, Fig.10)
14. チャルカツィンゴの浮き彫り 9号 (Grove 1968, Fig.7)

碑19号では翼蛇を背にした人物の頭飾りに2個のX字型を併置してある。その下にはまたU字型の枠組が付されている(図4-12)。このほか隅丸方形、長円形の枠の中に斜格子と共に収められたものもあるし(図1-1)、特殊なものとしてはフンボルト石斧の中に別のシンボルと複合した形で現われている(図6-1)。これはマヤの火のシンボル(表XV-12)の原型であろう。

3) V字型

この形態は、本来ジャガーの眉間にあるシワ状の紋を様式化したものと考えられているが、オルメカでは幼児像やジャガー人間の頭部の切り込みとして表現されている。それは恐らくオルメカ族の祖先とか神話上の特別な人間の神聖性を明示するために考案された一種の標章と判断される。先述したラ・ベンタの祭壇5号にある神官に抱かれた幼児の頭部をはじめ、ヒスイ製の小型彫像には、この種の切り込みが顕著にみられる(図4-11)。またその箇所からは、しばしばトウモロコシの穂が生育している(図5-1)。

この頭部の切り込みは、更に記号化され、単独のV字型シンボルとして、さまざまな文脈の中に出現している。とくに彫像の眉間や顔面、牙や体部に印されたり、額や胴の帯飾りとして付随している場合が多い(図4-3, 5-1~4, 6-2, 3)。またV字型自身がトウモロコシその他の植物のシンボルと化したり(図6-4)あるいは後述するステップ状の図形と組合わされて、独特の型のシンボルを構成している。

4) ステップ型

原型はつかみにくいですが、例えばチャルカツィンゴの浮彫り1号に描かれた雨雲の形から発生したものかもしれない(図4-13, 表IX-12)。雨雲を幾分か様式化した形はサン・ロレンソの石彫52号のジャガー像の頭部(図4-9)、ゲレーロ州のトラコテペック(Tlacotepec)発見の石板にみえる頭飾りの中にある(図5-5)。ラ・ベンタ遺跡のヒスイの敷石遺構は(図5-6)、ジャガーの顔面を様式化したものであるが、そこにも左右対称の位置にステップ型のデザインが4個配置されている。そして次第に輪郭を整えて、笏杖や護符(図5-7, 8)の中にシンボルとしておさまるようになる。チアパス州のシモホベル(Simojovel)から出た奉献斧では、V字型と並列されて絵文字的な様相を呈している(図6-3)。更に長方形をなすV字型の枠の中にステップと一種のT字型とを配合した独特のシンボルが形成される。そしてラス・リマス像の顔面には額の箇処に4個、口の周辺を囲む帯の中に4個といずれもこのシンボルが左右対称の位置に付されている(図5-3)。後にオアハカ地方に出現する絵文字Cと呼ばれるものは、恐らくこのシンボルから発達したものと考えられる。

5) Y字型

オルメカのイコノグラフィーでは、ジャガーの舌や牙の先端はふたまたに分岐している。これはヘビの特性を象徴したものと解釈されている(Bernal 1969, p.100)。事実、チャルカツィンゴの浮き彫り5号やオストティトランの壁画に描かれたドラゴンの舌は、Y字型に分岐した形で示されている(図4-6, 7)。ラ・ベンタの石棺(記念物6号)には大きく開いたジャガーの口に分

＜メソアメリカに於けるシンボルの諸体系＞

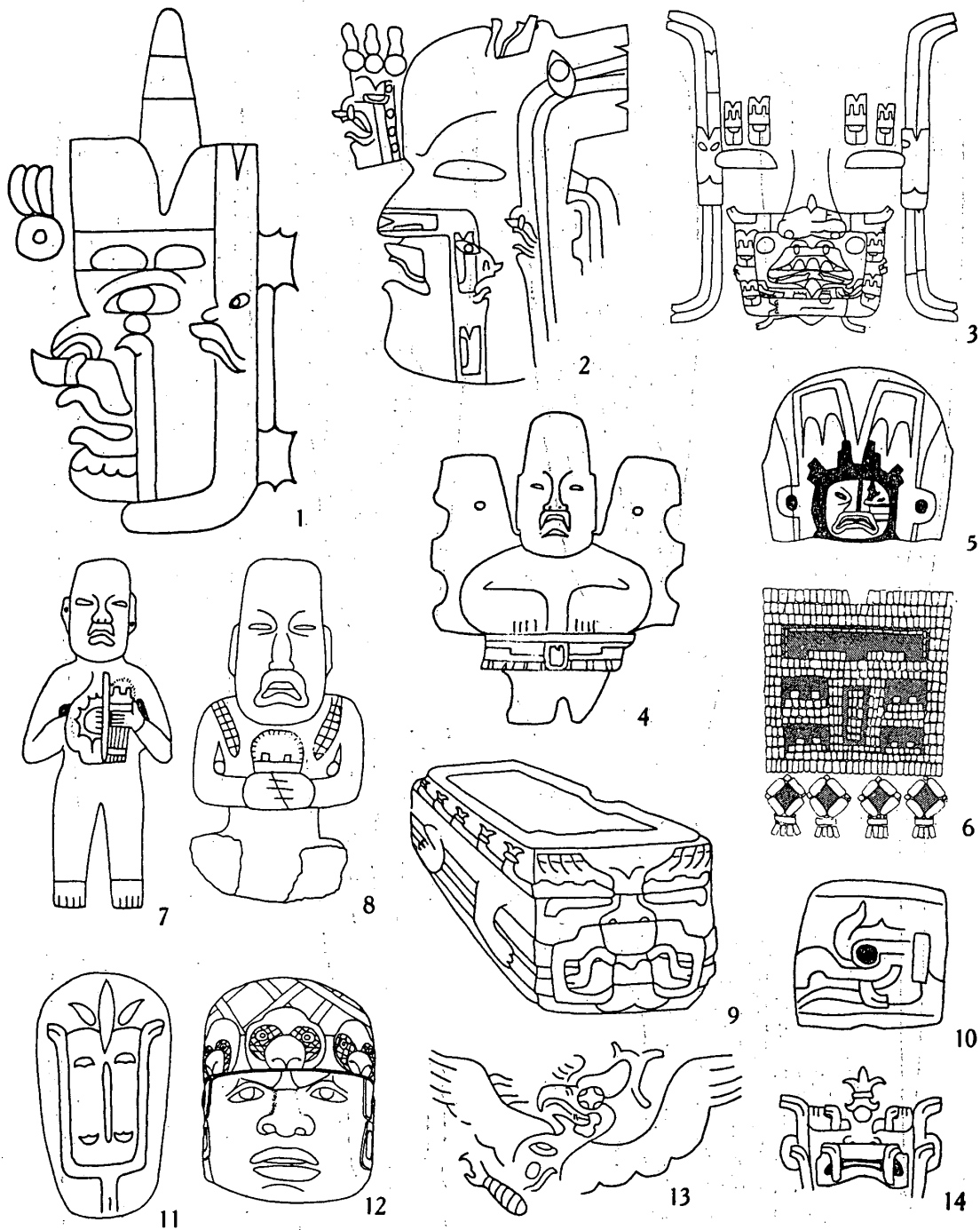


図 5

- | | |
|------------------------------------------------------|-------------------------------------------------|
| 1. ラ・ベントの奉獻斧(Piña Chan and Covarrubias 1964, Fig.26) | 8. 石偶(Piña Chan and Covarrubias 1964, Fig.21) |
| 2. 石板(Coe 1965c, Fig.20, Groth-Kimball 1953, Pl.21) | 9. ラ・ベント記念物6号(石棺)(Covarrubias Fig.30) |
| 3. ラス・リマスの石偶(Medellín Zenil 1965, Pl.5) | 10. ラ・ベントの奉獻用耳飾り(Drucker 1952, Pl.54) |
| 4. グァナカステの石偶(Coe 1965c, Fig.16) | 11. ラ・ベントの奉獻斧(Idem, Fig.476) |
| 5. トラコテペックの石彫(Idem, Fig.4) | 12. サン・ロレンソの巨石頭像2号(Clewlow et al, 1967, Fig.17) |
| 6. ラ・ベント敷石遺構(Drucker et al, 1959, Fig.1) | 13. ラ・ベントの黒燿石核(Drucker 1952, Fig.48) |
| 7. サン・クリマトバル・テパトラシュコ(Coe 1965c, Fig.8) | 14. 石斧(Joralemon 1971, Fig.170) |

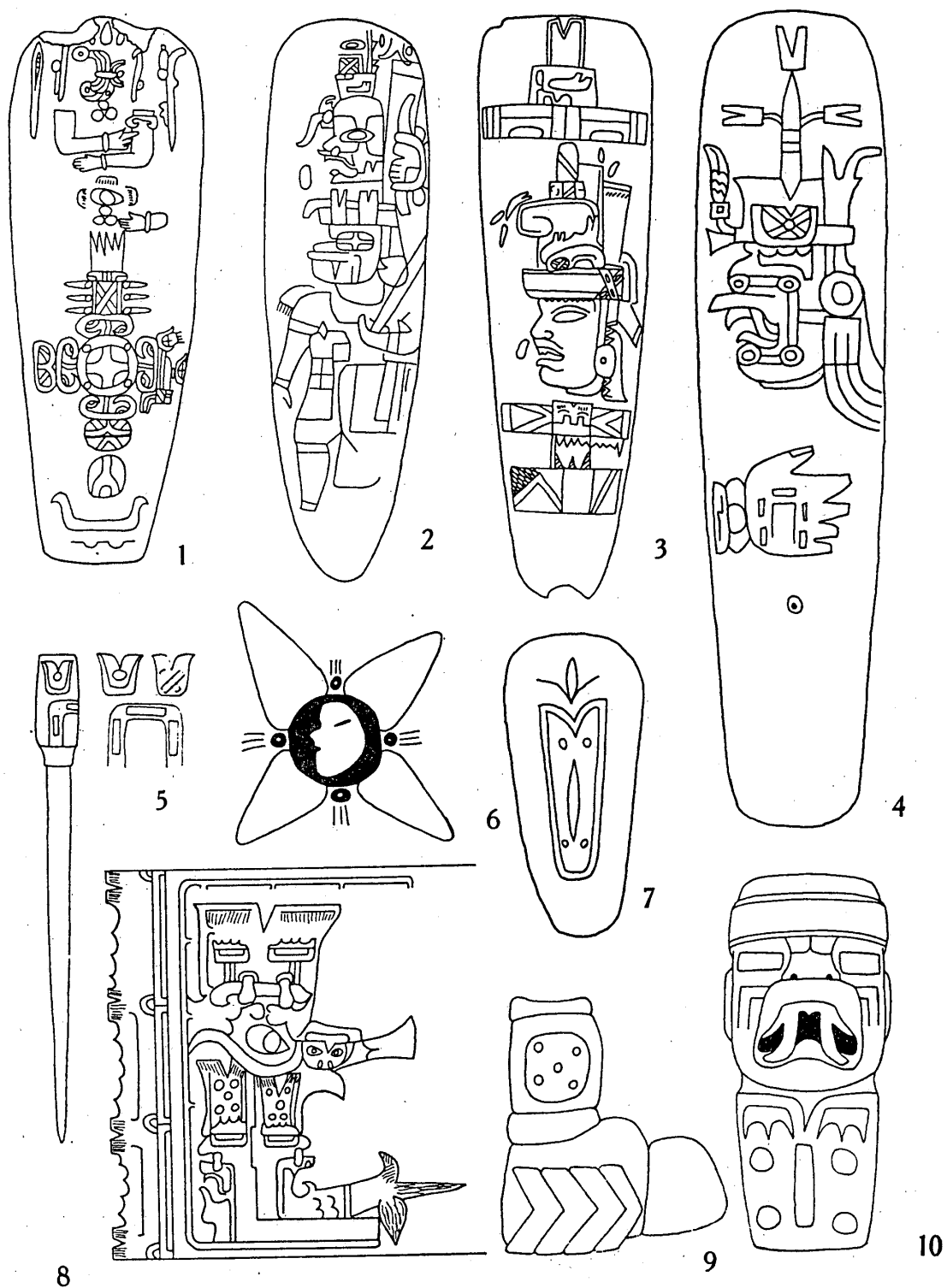


図 6

1. フンボルト石斧(Coe 1965c, Fig.18)
2. 石斧(Joralemon 1971, Fig.33)
3. シモホベルの石斧(Coe 1965c, Fig.17)
4. 石斧(Covarrubias 1957, Fig.33)
5. キリ(Joralemon 1971, Fig.124)

6. オストティトランの壁画1-a(Grove 1970, Fig.8)
7. ラ・ベントの石斧(Drucker 1952, Fig.47-c)
8. トラバコヤの土器(Joralemon 1971, Fig.146)
9. サン・ロレンソの石彫(Coe 1968, Fig.7)
10. 石斧(Kubler 1962, Pl.28a)

岐した舌と牙とが表現されている（図5—9）。またこの石棺の側面には、小形の様式化された環状文をつけた舌が連続文様として描かれている。この種の文様は環付魚尾型文として、後にイサパやマヤの石碑に伴ってよく現われてくるけれども、オルメカ時代には、独立したシンボルとしてはそれほど発達していない。他方、牙のモチーフ（図3—11）はシンボルとして顔面部に施されたり（Joralemon 1971, Fig. 180）、また石斧の中では一連の絵文字的文脈の中に配合されたりしている（図6—2）。またチャルカツィンゴの浮き彫り1号には、U字型の牙によって洞窟を象徴した図柄がある。そこにはジャガーの口と洞窟とを同一視する観念連合が認められる（図4—13, 14）。同種のモチーフはまたラ・ベンタの奉献斧にも刻まれている（図5—11）。ふたまたに分岐した牙は、よくジャガー神の顔の側面を輪郭づけたり（図5—1～3, 14）、あるいはトゥモロコシのシンボルと組み合わせられているけれどもこの方式はイサパへと継承されている。

6) 十字型

マヤの象形文字を基準にして一般に Kan Cross と呼ばれている。大型のものはラ・ベンタの巨石頭像1号と4号の耳飾りにあるが（図3—2, 4）、一般にはジャガー神とかコンドルの眼の中に施されている（図6—2, 5—13）、トラティルコの石斧（Joralemon 1971, Fig. 34）、フンボルト石斧の場合には、四隅に4つの点を配置してあることに注意すべきであろう。

7) 花卉型

マヤでは Kin sign とよばれている。トラティルコの印章ではジャガー神の写実的な頭像と、それを抽象化した文様との中間に配置されており（図1—8）、恐らくその神と関連のあるシンボルと考えられる。オストティトランの壁画では四つの花卉に囲まれた中心に、擬人化された月の形象がある（図6—6）。これは月と関連のある神話のモチーフを象徴したものと想像される。このほか若干の土器の文様にも描かれているが、花卉型のシンボルは、オルメカではそれほど多くはみられない。

8) 五ツ目型

テオティワカンでは太古の火の神のシンボルで、これは先述した十字型の中心に点を加えた形のシンボルとして表示され、またケツァルコオアトルの十字型とも呼ばれている（Séjourné 1966, p. 95）。オルメカではサン・ロレンソの記念碑43号に隅丸方形の枠の中に五点を配したものが一つの典型的なシンボルとなっている（図6—9）。トラパコヤ出土の土器の装飾には、V字型の形象と結びついて出現している（図6—8）。このほか中心に一本の棒を置き左右に四点を配合することによって構成されたデザインも（図6—7, 10, 表XI—4～6）、五ツ目型と同系統のもので、これはジャガーの顔面を抽象化した、ラ・ベンタの床面モザイクにその原型があると考えられる（図5—6）。このほかにも菱形、円、渦文などもあり、いずれも、後の時代の様式へと継承されている。

2 イサパのシンボル

イサパ様式とはメキシコのチアパス州からグァテマラ高地、太平洋沿岸の山麓地帯にかけて、形

成期の後期から原古典期の頃に発達した石彫の様式に対して命名されたもので、ダイナミックな曲線や渦文をもってする豊かな装飾性を特色とする。石彫は浮き彫りを主体とし、本来は宗教的建造物の壁面装飾として制作されたものであるが、原位置を保っているものは殆んどなく、大半は断片的な石碑の形で発見されている (Miles 1965)。

石彫の主題は、神話上の物語を題材としているらしく、人間や動物が混合して複雑な神々を生み、それらが互いに闘争を繰り返す情景がみられる。

イサパ様式は個々の図像表現や全体の構成には独特の手法を有するものの、神々の原型ならびにシンボルの体系はオルメカ文化に由来することは明らかで、またその様式は逆にメキシコ湾岸、中央高原、オアハカ地方、更にメキシコ南部からグアテマラ一帯へ波及したが、とくにマヤの初期芸術には顕著な影響を及ぼしている。

イサパ様式では、オルメカに比べるとシンボルの数は制限されてはくるものの、型的には整えられて、2種以上のものがより圧縮された形で示されている。オルメカから継承したシンボルとしてはU字型、X字型が多く、それらにトウモロコシや渦巻文あるいは水流とか火焰を想わせる流動的な文様が付随している。このほかオアハカ地方のモンテ・アルバンや中央高原のテオティワカンに発達したシンボルの要素も新たに加わっている。

1) U字型

イサパ様式では猫科動物と爬虫類の特性を具えた複合神像の頭部と結びついて出現している場合が多い。この神は渦文のある瞳をもち、上唇は長くのびて且つ上方へ巻き上り、歯牙は表現されているものとなないものがある。また図像によって猫科と爬虫類の特性を強調する度合も異なっている。アバフ・タカリク記念物1号、(Thompson 1943c, p.111—a)、サン・イシドロ・ピエドラ・パラダの石碑(図7—1)、チアパ・デ・コルソの骨器(図7—2)、カミナルフユ石碑10号(図7—3、4)などでは、U字型はいずれも鬚をたくわえて牙をもつジャガー人間の眉とか眼窩の箇所が付されている。但し、アバフ・タカリクの石碑2号では、鬚の人物の顔の直下に、火焰を表わすシンボルと組み合わされている (Miles 1965, Fig.7)。

イサパ様式ではよく石碑の上段と下段をパネル装飾で区切る方式をとっている。U字型のシンボルは、普通その上段の枠組みにセットされているが、それは輻輳するシーンの中で最も重要なテーマは何であるかを象徴するために設けられたと考えられる(図7—5)。トレス・サボテスでもセロ・デ・ラス・メサス(Cerro de las Mesas)でも常にシンボルは上部のパネルの中央に位置している。この伝統は原古典期にはペテン地方へと波及し、ティカルの遺構5D-sub-10の壁画にも、ジャガー神を象徴するU字型のシンボルが、パネルの中に二回つつ繰り返して表現されている(Quirarte 1977, Fig.10, 2-c)。これと同種の装飾は、アバフ・タカリクの石碑3号の下段に設けられたパネルにもあって(Miles 1965, Fig.9)、そこではU字型は「長い唇の神」の眼窩の位置に付されている。

U字型の要素はアバフ・タカリクの石碑4号では幾分変わった文脈の中に現われている(図7—

<メソアメリカに於けるシンボルの諸体系>



図 7 イサバ様式

1. サン・イシドロ・ピエドラ・パラダの石碑 (Covarrubias 1957, Fig.25)
2. チアパ・デ・コルソの骨器 (Lowe and Mason 1965, Fig.21)
3. カミナルフユの石碑10号(部分) (Miles 1965, Fig.3-b)
4. カミナルフユの石碑10号(部分) (Quirarte 1977, Fig.10,1-d)
5. イサバの石碑3号 (Idem, Fig.10.4-b)
6. アバフ・タカリク石碑4号 (Idem, Fig.10.4-e)
7. カミナルフユの象形壺文様 (Kidder et al. 1946, Fig.76-b)
8. カミナルフユの土器文様 (Idem, Fig.186-a)
9. イサバ石碑2号 (Quirarte 1977, Fig.10.5-b)
10. カミナルフユの石碑11号 (Miles 1965, Fig.15)
11. カミナルフユの土器文様 (Kidder et al. 1946, Fig.97-g)
12. テオティワカンのシンボル (Idem, Fig.95-a)
13. カミナルフユの土器文様 (Idem, Fig.204-a)
14. カミナルフユ石碑4号(部分) (Miles 1965, Fig.2-d)
15. イサバ石碑3号(部分) (Idem, Fig.2-h)
16. カミナルフユの土器文様 (Kidder et al. 1946, Fig.97-a)
17. カミナルフユの土器文様 (Idem, Fig.97-e)

6)。ここでは胴のない人間の頭像は巨大な竜の顎の中に置かれ、また竜の胴体はU字型に屈折し、中央には花卉型の Kin sign とその帯状の中には多数のU字型文様が含まれている。そして末端にはまた四点をもつ方形の枠の中にU字型シンボルがある。このシンボルは恰も水流の中に浮かぶかのように配置され、両側は大きく開いた竜の顎で区切られている。竜の顎はまたそれぞれ独立した単元をなし、斜行T字型やU字型のシンボルを携えている。この図像はイサパ様式の中でもとくに複雑な構成を示しているが、少なくともそこには4種類のシンボルが包摂されている。このほかU字型はオアハカ地方で山や丘を表わす絵文字に似た枠の中にも認められる(図8-2)。

2) 斜行T字型

後述するモンテ・アルバンの絵文字Cに由来するものであるが、このことは形成期の後期に両地域間には明らかに文化接触のあったことを立証している。オアハカ地方で斜行T字型は水のシンボルとされているが、チアパ・デ・コルソの骨器でも額の箇所にもみられるし(図7-2)、またカミナルフユの石碑10号の人物の頭飾りの一部にもU字型と合成されているのがわかる(図7-4)。このほかU字型のシンボルはカミナルフユ出土の土器の装飾にも“長い唇の神”の鼻の個処に認められる(図7-8)。また人物象形壺の前垂れの模様にも認められる(図7-7)。

3) X字型

イサパ様式では、このシンボルはとくにコンドルのような翼をもつ“長い唇の神”と密接な関連性を示している(図7-9)。この種の有翼神の図像に於ては、通常U字型は逆立ちの姿勢をとった神の膝上の箇処に、またX字型は左右の翼の中におさめられている。カミナルフユの石碑11号の主題は“長い唇の神”であるけれども、上方には有翼神の像があり、そこでもやはりX字型は翼の中に配置されている(Miles 1965, Fig. 15-a)。またこの石碑ではU字型、X字型ともに四隅に点のある方形の枠を伴い、更に水流とか火焰あるいはオルメカの分岐した舌から発達したような魚尾型やトウモロコシを様式化したような文様が付随している(図7-10)。

カミナルフユの円筒形容器には通称“へびX”と呼ばれる神の頭像が描かれている(図7-11, 16, 17)。この神も“長い唇の神”と同系統のもので、その系譜はオルメカに遡ることは、すでにM. Covarrubiasの研究によって明らかにされている(Covarrubias 1957, pp. 81-83, Fig. 36)⁹⁾。

元来カミナルフユの原古典期から古典期にかけての文化には、テオティワカンの影響が極めて強く、円筒形容器そのものもテオティワカンからもたらされたものである。またこの地方では、主神であったはずの“長い唇の神”の眼も中央高原の雨の神トラロックの特徴を示していることも興味深い。このほかテオティワカンで“へびの眼”といわれる水のシンボルも容器の蓋の文様として現われている(図7-12, 13)。

4) 渦文

イサパ様式の“長い唇の神”の瞳孔は、小さな渦文で表現されている場合が多い。これはオルメカの神像にみられなかった特色で、上述したテオティワカンの“へびの眼”に由来するものと考えられる。カミナルフユの石碑4号、イサパの石碑1号、3号の神像の眼には、いずれもこの型の渦

文がある（図7—14, 15）。

カミナルフユの化粧漆喰で装飾された円筒形土器では、渦文の瞳の上に点と棒で囲まれた偏平なU字型、X字型のシンボルが重ねられており、この手法はイサパ系統の特色となっている。そしてまた四隅に点を配した方形の枠そのものにも別のシンボリカルな意味が込められているように思われる（図7—16）。

オルメカ式石斧に刻まれたジャガー神の側面像には、口の周囲を同じように四点で囲んだ例がある（図6—4）。またこの神像の上唇は可成りのびていて、“長い唇の神”の原型を想わせる。したがって、この特殊な表現法もまたオルメカから由来することは明らかである。

3 サポテカのシンボル

モンテ・アルバンの「舞踊図」には、確かにオルメカ様式の影響が認められるものの、このような初期の石碑に刻まれた絵文字は、オアハカ地方特有のものが多く、また単独のシンボルとして使用された例は少ない。わずかにサン・ホセ・モゴータ（San José Mogote）のロサリオ相に属する浮き彫り像（図8—1）にU字型のマークがみられるものの、それはシンボルというより、地名か、名称を表わす絵文字の一部として表示されているかのようなのである。

しかしながら、オアハカ地方には、祭祀用とか高位の人物の墳墓に納める副葬品として製作された通称“火鉢”と呼ばれる大型の象形土器があり、これには明らかにオルメカ的な人物やジャガーの顔面と一緒にシンボル・マークが付されている。例えばモンテ・アルバンⅠ期に属する墳墓111号出土の象形土器（Caso 1965a, Fig. 12）にはオルメカ的な容貌をした人面形象の額の箇処に、花卉型（Kin sign）のシンボルをもつものがあり、またヤグル（Yagul）の33号墳とかモンテ・ネグロの神殿Xから発見された同種の土器（Bernal 1969, pl. 71-b）にもトウモロコシを様式化したシンボルが付されている。

U字型のシンボルは、モンテ・アルバンではⅡ～Ⅲ期にかけて増加してくる。マウンドJから発見された石碑41号ではU字型のマークはこの地方で発明された独特の山を表わす大型の絵文字の一部に組み込まれている（図8—2, 表V—11）。また墳墓104号では蓋石に刻まれてあったり、北側の壁のニッチの上にも彩色で描かれた例もある（Caso and Bernal 1952, Fig. 117a, b）。これらと同じ形態のU字型シンボルは墳墓7号の天井をも飾っている（Caso 1938, 77）。この場合シンボルは明らかに“大地の内奥”あるいは洞窟という観念と結びついており、ラ・ベンタの祭壇4号の石彫において、洞窟の入口を縁どっていた大型のU字型シンボルと同じ観念や表現手法を踏襲したものと見做せるであろう。他方、オアハカ地方のエトラ谷（Etla）付近の諸遺跡から発見された石碑類にも、多数のU字型シンボルが付随している。年代的には形成期に遡るものと推定される（図8—6～9）。

モンテ・アルバンのⅡ～Ⅲ期にかけては、U字型のシンボルを囲む外枠に四点を配置する方法も現われてくる。モンテ・アルバンの石碑2号では、ジャガーを戴せた祭壇状の図像、これは山を表わす絵文字と解釈されているが、その中に四隅を長方形の点で仕切られたU字型のシンボルがある



図8 1.サン・ホセ・モゴータの石碑(Blanton et. al.1981, Fig.2.8)
 2.モンテ・アルバンJ-41号石碑(Caso 1965, Fig.8)
 3.オルメカ式の仮面(Covarrubias 1957, Fig.22-C)
 4.モンテ・アルバンの象形壺(Idem, Fig.22-D)
 5.モンテ・アルバン104号墳の板石(Idem, Fig.65)
 6.スチルキトンゴの石碑(Bernal 1974, Fig.8)
 7.エフトラの石碑(Idem, Fig.32)
 8.エフトラの石碑(Idem, Fig.35)
 9.スチルキトンゴの石碑(Idem, Fig.1)
 10~14. 絵文字Cの装飾(Leigh 1970, Figs.15,24,26,57,61)

(Paddock 1970, Fig. 143)。104号墳は見事な装飾壁画を伴うことで有名であるが、墓室の正面奥壁に描かれた主神像（雨の神トラロック）の額の中央部ならびに両耳の筒処には、隅丸方形の枠の中にU字型のシンボルがおさまられている（Covarrubias 1957, p. 148）。また同墳墓の入口を塞いでいた板石にも多数の絵文字が刻まれているが、その中にも四隅に丸い点を配したU字型が組み込まれている。この板石には、ほかにも点をもたない偏平なU字型のマークがいくつか混入しているが、それらは、おそらく暦の日付けと関連のある記号のようになって、特定のシンボルの性格をもつものかどうかは認定しがたい（図8—5）。

このほかにもU字型シンボルは、一般に広嘴鳥（Broad billed bird）と命名される熱帯の鳥類をかたどった象形壺にもよく付随して現われている（Paddock 1970, Fig. 80, 106, Caso 1952, 214, Fig. 351）。この場合U字型は鳥の眼窩上とか胸の筒処に単独に配置されている。通称 Zegache 容器と呼ばれる同種の鳥の面をかたどった土器（Paddock 1970, Fig. 21）では眼窩と両頬の筒処に、大きな渦文に併合された斜行十字型のシンボルが付されている。またモンテ・アルバンの77号墳の副葬品として納められていたところのやはり広嘴鳥をかたどった容器では（Paddock 1970, Fig. 80）U字型のシンボルが、眼窩と両耳に刻まれている。

U字型と斜行十字型の二種のシンボルの組み合わせは、先述したイサバ様式にもしばしばみられるところから、広嘴鳥を神々の体系にとり入れた背景には、グアテマラ高地から太平洋山麓地帯へかけて発生した“長い唇の神”の影響があったのではないかとする推論も出されている（Quirarte 1977, p. 257）。但し、斜行十字型のシンボルについては、次に述べる絵文字Cから派生した可能性もあるので、両者の関係については、なお慎重に検討する必要がある。

サポテカ様式の中でも最も古くから存在し、かつ広汎に普及したシンボルに絵文字Cと呼ばれるものがある。この記号はモンテ・アルバンのI期からIV期へと非常に長期間に亘って存続し、暦の文字の中にもみられるが、むしろ象形壺と結びついて発達し、さまざまなヴァリエーションを生んでいる（Caso 1928, Leigh 1970）。

絵文字Cは本来、水を表わすシンボルで、初期の形態は水瓶の象形文字を原型としているという説もあるが（Leigh 1970, p. 257, Fig. 1—7）、筆者はむしろオルメカ式のV字型とステップとを合成したジャガー神のシンボルから由来したのではないかと考える（図5—3, 表X—9）。事実、絵文字Cはジャガーをかたどった象形壺に圧倒的に多く付随している（Paddock 1970, Fig. 112—117）。そしてII—III期にかけては、イサバ式の先端が渦巻状に弯曲するU字型や植物、貝その他のモチーフも加わって次第に華麗な装飾性を増していく。この絵文字Cはのちにマヤに吸収されて、M神のシンボルとなる（表XX—12）。

このほかサポテカ固有のものとしては、楕円形の枠の中に点を配置したり、あるいは短線、斜線を施して水のシンボルとしたものがある。これにはまた4隅を独特の花弁型の文様で囲んだ例もしばしばみられる（表XIII—9—11）。またイサバ様式に現われる凸型のもものはサポテカでは“山”または“丘”の簡略化された象形文字と見做されている（Caso 1965, Fig. 15）。

モンテ・アルバンではⅢ期以降には土器型式にテオティワカンの様式の影響があらわれてくるが、とくに形象の頭飾りに加わるケツアル鳥の羽根模様とか雨神トラロックを象徴する円盤または同心円状の装身具に認められる (Paddock 1970, pp.126—149, Fig.90—135)¹⁰⁾。このほかにもシンボルとしては、鏡かあるいはヒスイを象徴する円盤やまたテオティワカン様式の図像によく描かれている巴型の文様、花卉、貝殻、その他のものがある (表XIV 6—12)。

サポテカ文化の変遷をシンボルを通じて要約すると、Ⅰ期はオルメカ的な要素が強く、Ⅱ期にはイサパ様式との関連性が認められ、Ⅲ期はテオティワカン文化の影響があらわれていることがわかる。

4 マヤのシンボル

マヤの象形文字は2種に大別される¹¹⁾。一つは神、人間、獣、鳥、神話上の生き物などの頭像で、一般にポートレート・グリフと呼ばれている。もう一つはシンボリックな記号で、それはそれぞれ対応する神の属性とか職能に、あるいはまた一種の観念連合などに由来しているものが多い。それらはとくに暦の日や月の記号にみられるが、しかもそこには上述した先古典期から原古典期にかけて、メソアメリカの各地に発達したシンボルが数多く採用されている。

それらの諸記号は、暦や碑文の文脈とは別に、単独で表示されていることもあり、その場合にはシンボルとしての機能を果していたものと考えられる。そこで、マヤの石碑や石彫あるいは、絵文書などでそれらの記号がどのような図像構成のもとに出現しているのかを、考察することにした。

1) U字型

初期の石碑類、たとえば、ライデン碑板 (Leyden Plate) やティカルの石碑31号では、神々の衣裳に付随して、多数のU字型シンボルが出現している。前者では前垂れ装飾の末端に様式化されたトウモロコシの模様と合成されている (図9—1)。ティカルの例では頭飾り、帯飾り、儀式用の持ち物などに小型のU字が数多く内包されており、またとくに胸飾りの部分は装飾性の強い枠の中におさめられている。それはイサパ様式をそのまま継承したものである (図9—2, 表XIX—11)。このほか単独のシンボルとしては、獣神をかたどった祭壇の石彫に顕著な例が認められる。キリグア (Quirigua) の獣神像9号の上面には、先端が外側に大きく渦巻いた曲線的なU字型が、ジャガー神の鼻の中央部を占有している。またその額の箇処には、逆に内側に少しカーブした直線的U字型が付されているが、いずれも水のシンボルを伴っている (図9—3)。

コパンの祭壇M号 (図9—15) と石碑B号にもやはり獣神の鼻の位置に、水のシンボルを伴って現われている。キリグアの祭壇B号の南面に刻まれたカメ神の眼は大きな方形のU字型で輪郭がとられており、瞳孔としてX字型のシンボルがはめ込まれている。また両眼の上の眼窩の箇処には、水を表わす渦文が付されている (Kubler 1969, Fig.16—b)。

パレンケ (Palenque) の「十字の神殿」の壁面に刻まれた銘板には「生命樹」を象徴する十字架状の図像が描かれているが、その頂部と左右の箇処にそれぞれ異形のU字型がみられる (図10—10)。このほかコパンの石碑H号では鳥の頭飾りにも付されている (図9—14, 表XV—9)。

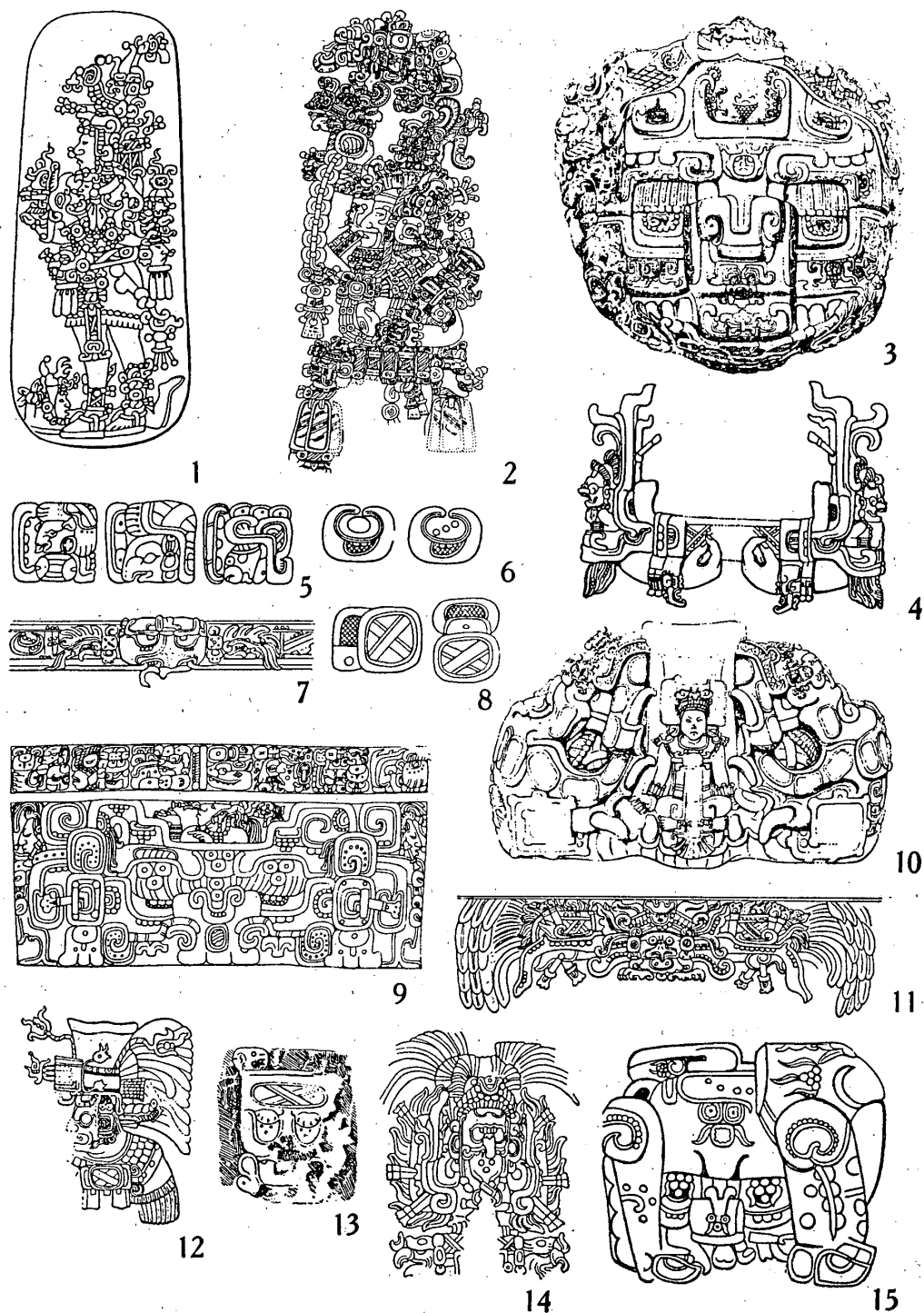


図9

1. ライデン碑板(Kubler 1969, Fig.57)
2. ティカルの石碑31号(W.Coe 1965, Fig.33)
3. キリグアの獣神像9号上面(Kubler 1969, Fig.18-b)
4. コパンの石碑N号(Spinden 1957, Fig.46-b)
5. マヤの象形文字(Idem, Fig.2-50~52)
6. マヤの象形文字(Thompson 1962, T-683a,b)
7. パレンケの石碑(Thompson 1971, Fig.11)
8. マヤの象形文字(Idem, Fig.16-11,12)
9. ボナンバックの石碑1号(Mathews 1980, Fig.3)
10. キリグアの獣神像P号北面(Kubler 1969, Fig.18-c)
11. ティカル神殿4号の石碑(Thompson 1971, Fig.20-10)
12. ピエドラス・ネグラスの石碑(Idem, Fig.12-10)
13. パレンケの宮殿C室の石碑(Kubler 1969, Fig.35-7)
14. コパンの石碑H号(部分)(Spinden 1957, Fig.70)
15. コパンの祭壇M号(Thompson 1971, Fig.15-12)

ボナンパック (Bonampak)の石碑1号の首長をのせた台座であるジャガー像の鼻にも水のシンボルと楕円形の枠におさめられた斜行T字型のマークと一緒にU字型は表現されている(図9-9)。

以上は主に記念石碑や祭壇などの図像に伴うものを例示したわけであるが、イサパ様式にあるような、小型の偏平なU字型は、マヤの場合に象形文字の接辞¹²⁾の形で頻繁に現われている(図9-5)。そして接頭辞として用いられる場合には、よく水のシンボルの前に付けられており、またその記号は後述するカンの十字形とかヤシュの記号あるいは貝のシンボルとよく置き換えられている¹³⁾。これらはいずれも水と関係をもつシンボルである(Thompson 1971, pp.72, 278-279)。このほか三日月形に似たU字型は、月のシンボルとして天体の帯装飾にも現われている(図9-6~7)。主辞としてのU字型はM神のシンボルとなっている。この文字はウオの月の守護神である7の数の神の頭像とよく交換されるところから、ジャガー神のシンボルと見做される(Thompson 1962, p.282)。

2) X字型

マヤの長暦の第2番目の月であるウオ(Uo)の象形文字は、X字型の主辞と黒を表わす接辞によって構成されている(図9-8)。この月の守護神は冥界を支配するジャガーである。この神は夜の太陽で、頭部には7の数のシンボルをつけているが、それはジャガーはこの数字の神でもあるからである。更にまた彼はアクバル(Akbal)の神で“夜、暗闇、大地の内奥”などを象徴している(Thompson 1971, p.73-75, p.107)。

キリグアの石碑A号とC号(図10-1, 2)、またピエドラス・ネグラス(Piedras Negras)の石彫(図9-12)では、ジャガー神の胸飾りとしてトウモロコシの模様と一緒に付されているし、また前垂れの装飾にもなっている。またキリグアの石碑C号では、主像であるジャガー神の口の中にも配置されているが、別に足首を飾る神像の口の中にもおさめられている(図10-2)。石碑A号でもやはり足首に同じ手法でX字型のシンボルが置かれている。このほか、ティカルの石碑20号の楣(図10-4)、パレンケの浮き彫り像の帯飾りにもなっている。後者の場合には手やすねの箇所も紐でX字型に縛られている(図10-6)。

もっと単純化されたX字型のマークは、へビとか天空のドラゴンの垂れ下った鼻や体部に頻繁にみられる。古典期の後期のプウク様式の建物、たとえば、ウシュマル(Uxmal)やカパー(Kabah)の正面入口の装飾として、一種の格子縞模様の形でX字型は密集しているがこれらもやはりドラゴンの体部を飾るシンボルと同様のものと見做される。

またX字型シンボルはケツァルコオアトル(翼蛇神)の眼窩の上にも現われた例がある(Morris et al. 1936, Fig.8)。またキリグアの獣神像P号、B号では瞳孔として眼の中に表示されている(Maudslay III, pl.12-a)。コパンの石碑N号では双頭のへビの形をした笏状の帯飾りにもみられる。この場合へビの口の中には“長い唇の神”の像がはめこまれている(図9-4)。コパンの石碑I号では、手首と足首の飾りとして周囲に四点を配した方形の枠の中にX字型がおさめられている(図10-3)。

＜メソアメリカに於けるシンボルの諸体系＞

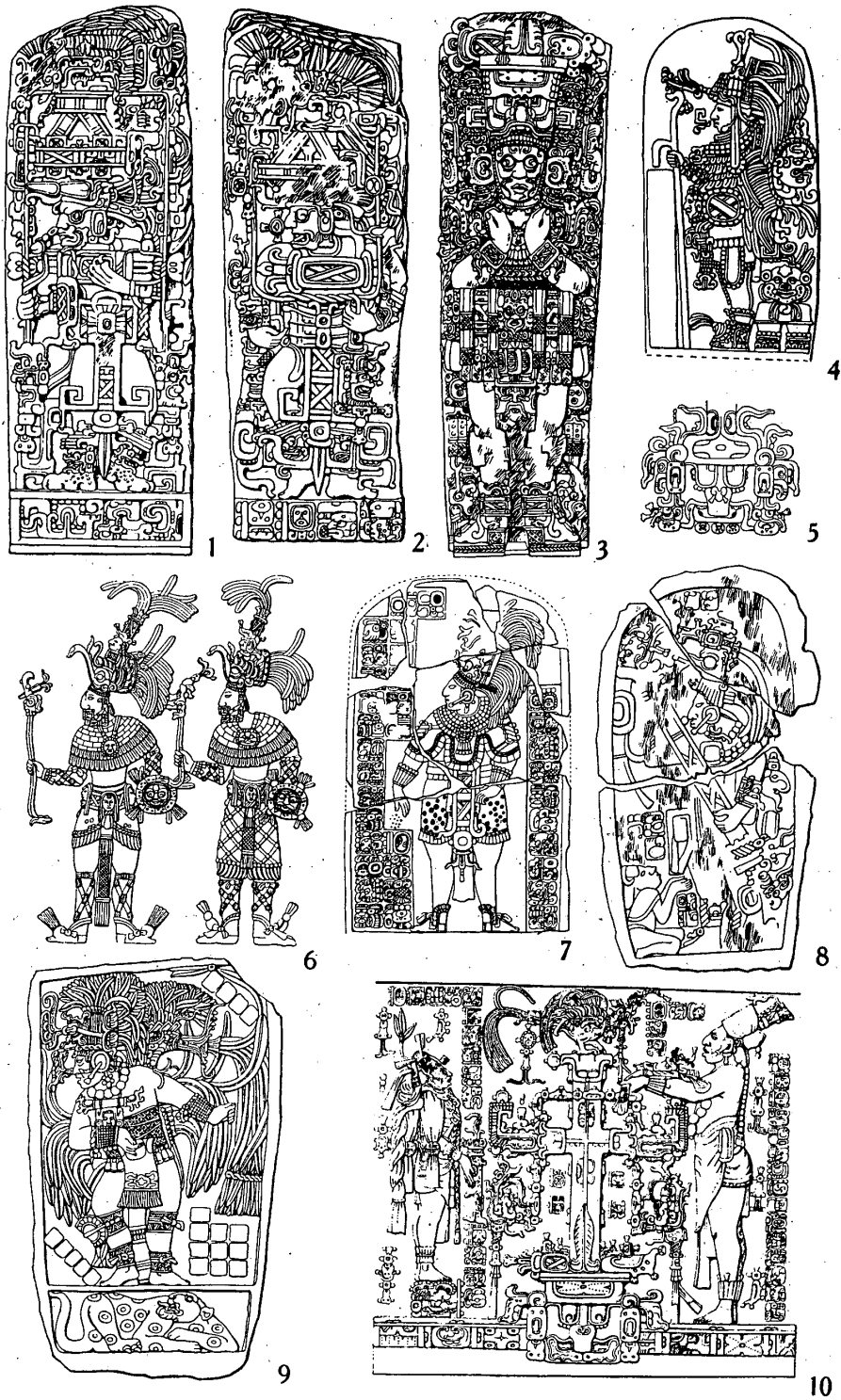


図 10

1. キリグア石碑A号(Maudslay, II, Pl.8)
2. キリグア石碑C号(Idem, Pl.20)
3. コバン石碑I号(Idem, I, Pl.63)
4. ティカル石碑20号(Robicsek 1975, Fig.84)
5. パレンケ「葉状十字の神殿」の銘板(部分)
(Maudslay, IV, Pl.81)
6. パレンケ「碑銘の神殿」の墓室内の浮き彫り
(Ruz 1958, Fig.17)
7. アクアテカの石碑1号(Robicsek 1975, Fig.193)
8. ラ・フロリダの石碑1号(Idem, Fig.233)
9. ラ・アメリカの石碑1号(Idem, 1975, Fig.119)
10. パレンケ「十字の神殿」の銘板(Maudslay, IV, Pl.76)

このほかパレンケの宮殿C室のジャガー神像の額の箇処にも描かれている(図9—13)。また同じくパレンケの石棺に刻まれた神官像の頭飾りにもみられる(図10—6)。先述したパレンケの「十字の神殿」の銘板やコパンの石碑H号、I号その他では、X字型が貝と植物の葉と組み合わせられて、三つ組の特殊なシンボルを構成している(図10—3, 10)。

ティカルの神殿4号の石碑では、ドラゴンの上部に刻まれたミミズク(Moan Bird)の両翼に対称的な位置にX字型が付けられている(図9—11)。

絵画の資料としては、ボナンパックの遺構1号、第一室の壁画に“長い唇の神”あるいはB神の額や頭上に三種類のX字型が認められる(Kubler 1969, Fig. 95)。またキリグアの獣神像P号でもジャガー神の頭上に様式化されたヘビの模様が付随して現われている(Spinden 1975, Fig. 32)。このほかドレスデン、パリ、マドリッドなどいずれのコーデックスにも神殿あるいは祠堂の如き建物の柱に、白と黒の2種類の枠におさめられたX字型シンボルがみられる(図11—24; Robicsek 1975, Figs. 131—133, 135—137)。またX字型の記号(火を表わす)は象形文字の中にもいくつか存在している(Thompson 1962, Fig. 186, Catalogue No. T. 563)。

3) カン十字(Kan Cross)

この記号はマヤの暦で一年の最初の月であるポプ(Pop)の象形文字に挿入辞としてよく現われている(表XVI—8)。ポプとはマヤ語では葦で編んだマットを意味する言葉であるが、カンの十字型はその意味を強めるために付されたものと考えられている(Thompson 1970, p. 107)。またポプは二義的には首長をも意味する。それはマットはマヤでは権威の象徴で、またこのマットの権威はときに“ジャガーのマット”とも呼ばれているからである(Roys 1933, pp. 66, 74)。首長の坐る玉座にはマットが敷かれるが、それはよくジャガーの毛皮でおおわれたり、また台座そのものがジャガー像である場合が多い。その様子はティカルの石碑20号、パレンケの宮殿内の浮き彫り、その他マヤの芸術にはよく表現されている(図10—4, 9)。したがって、ポプの意味を拡大すると首長と同義語になり、更に一年の最初の月のポプという記号は首長の地位を示すシンボルであったとも見做せよう。パレンケの石棺の側壁やヤシュチラン(Yaxchilán)の楣25号に刻まれた首長の頭飾りにはいずれもカン十字のシンボルがあり(図11—1, 4)、またラ・アメリア(La Amelia)の石碑1号でも首長の前垂れの箇所にもそれは付されている(図10—9)。この月の守護神がジャガーであるのも、やはり権威の観念と関係があることを物語っている。また事実、コパンの象形文字の階段その他でもジャガーの頭像にカン十字型がシンボルとして付随している例がある(表XVI—8)。

カンの十字型はまた第17番目の月であるカヤブ(Kayab)の象形文字にもよく随伴している(表XVI—9)。カヤブの主辞は動物の頭像で表わされているが、オウムとカメのいずれが正しいかということで研究者の間に意見も分れているが、J. E. S. Thompsonは多数意見を採用して、カメであろうと推定している(Thompson 1970, p. 116)。そして、その有力な理由としてカヤブの頭像文字にカンの十字型の伴うことが挙げられている。カン十字は普通、水のシンボルと黄色を表わす

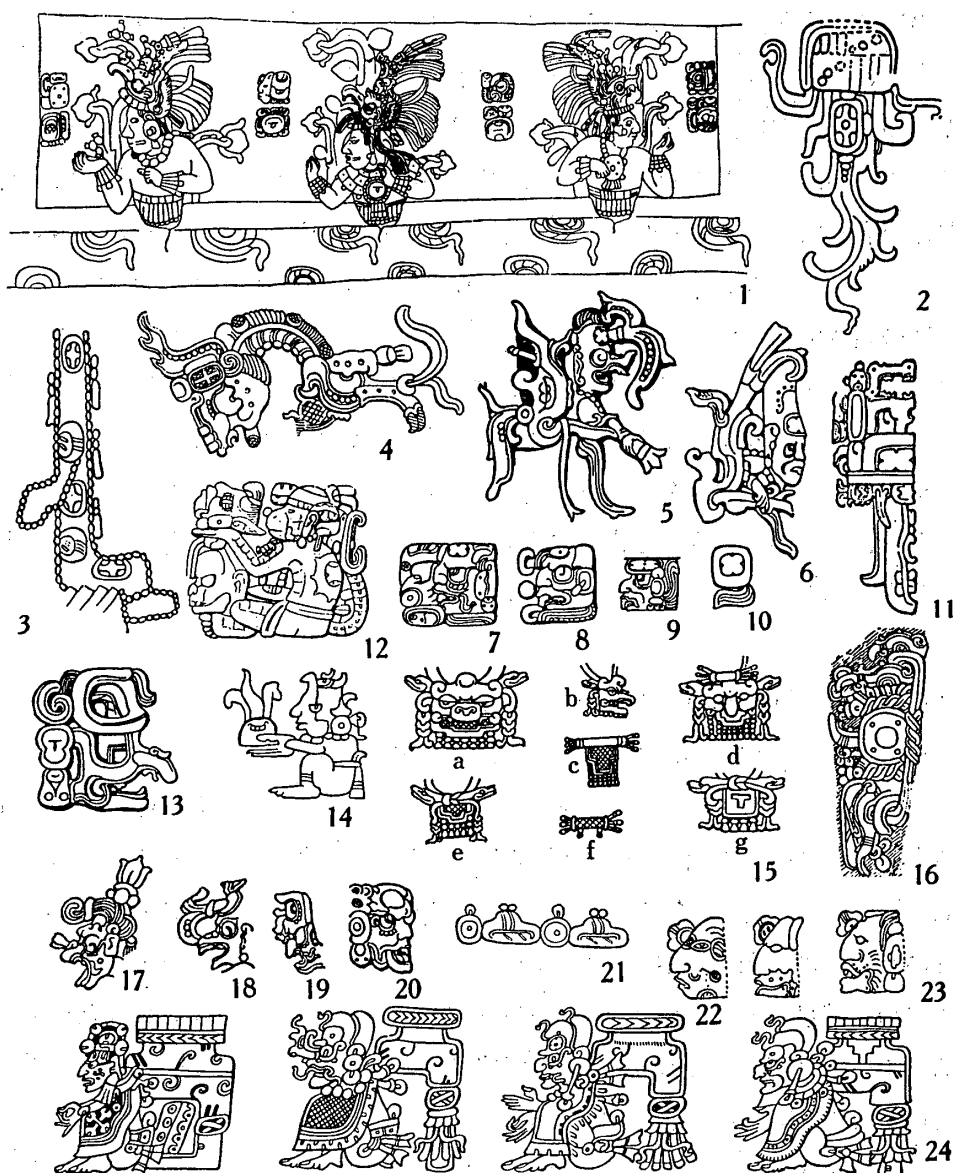


図 11

1. パレンケの石棺西壁の浮き彫り (Ruz 1958, Fig.13)
2. キリグア獣神像P号(部分)(Thompson 1971, Fig.44-4)
3. ヤシュチラン石碑7号(部分)(Idem, Fig.44-3)
4. ヤシュチラン楣25号(部分)(Kubler 1969, Fig.64)
5. コパンの石碑(Spinden 1957, Fig.80)
6. コパンの石碑(Idem, Fig.91-e)
7. コパンの石碑(Idem, Fig.91-b)
8. ヤシュチランの石碑(Idem, Fig.91-c)
9. チチュン・イツアの石碑(Idem, Fig.91-d)
10. コパンの象形文字(Idem, Fig.91-g)
11. ピエドラス・ネグラス石碑9号(部分)(Kubler 1969, Fig.58)
12. ヤシュチラン楣48号(Thompson 1971, Fig.29-10)
13. パレンケ宮殿D室の浮き彫り(部分)(Kubler 1969, Fig.33-f)
14. Madrid Codex 97d(Thompson 1971, Fig.12-9)
15. コパンの石碑(胸飾り)(Spinden 1957, Fig.43a-g)
16. コパンの石碑(Idem, Fig.41)
17. 長い鼻の神(B神), パレンケの石碑(Idem, Fig.96-e)
18. 長い鼻の神(B神), コパンの石碑(Idem, Fig.96-f)
19. ローマ鼻の神(D神), ティカルの石碑(Idem, Fig.96-g)
20. ローマ鼻の神(D神), コパンの石碑(Idem, Fig.96-h)
21. パレンケ宮殿D室浮き彫り(部分)(Kubler, 1969, Fig.33)
22. 9の数字の頭像, コパン(Thompson 1971, Fig.24-51)
23. 19の数字の頭像, パレンケ(Idem, Fig.25-34,35)
24. Dresden Codex 26b(Robicsek 1975, Fig.130)

記号との二つの意味をそなえているが、カメはマヤの伝承では太陽とも関係のある動物であって、黄色とも符合する。オウムはとくに水とも黄色とも関係がない。

ポップとキャブの月の文字には共にカン十字が付随しており、それが両者を結ぶ唯一の共通項となっているわけであるが、マットの葦とカメは水と関係があり、またジャガーも本来は農耕神として水と密接な関係を有しているところから、カン十字も水のシンボルに比定することができよう。

ドレスデン・コデックスの37頁のaにある大地の神の図像にもやはりカン十字は明示されている。この老神像は別の箇処では貝のシンボルを背負っている。またこれと同種のカン十字はキリグアの石碑H号、P号やヤシュチランの石碑7号その他では水流を表現したと思われる図像の中にも配置されている(図11—2, 3)。またパレンケの「葉状十字の銘板」では大地にうづくまる怪獣神の額の箇処に置かれ、その神の頭上からはトウモロコシの発育する図柄が刻まれている(図10—5)。またこの銘板を奉納した同じ祠堂内や宮殿E室の壁面には骨、ヒスイ、植物のシンボルとカン十字とを組合わせた文様が多くみられ、なかには“長鼻の神”の頭上に7の数字を配合した例もある。

4) T字型

マヤの第2番目のイク(Ik)の日の象形文字では、T字型の記号が主要素をなしている。またシェルハス(Schellhas, P.)の分類によるB神(通称“長い鼻の神”)の名称を表わす象形文字の中にも顕著な形で示されている。これにはまた接尾辞として、斜行T字形も随伴している(表VIII—7)。

パレンケの宮殿D室の西側の門柱を飾る浮き彫り像では、B神の頭上や耳飾りにみられ(Kubler 1967, Fig. 33—b, c), また同じくパレンケの「碑銘の神殿」に内蔵されていた墓室の壁面浮き彫りでは、神官のヒスイの首飾りの中にシンボルとして表示されている(図11—1)。

またキリグアの石碑C号の北面には、ジャガー神の鼻の先端や両膝に配置された小神像の胸飾りとしても付随している(図10—2)。コパンの石碑H号の南面ではT字型のマークはトウモロコシの穂を伴っている(表XVII—8)。T字型とトウモロコシとの関係は、絵文書類にもよく現われている。たとえば、マドリッド・コデックスの28頁には、トウモロコシの発芽とか生長と密接な関係がみられ、また若いトウモロコシの神が、T字型のイクの記号とトウモロコシとを交互に運ぶ絵図が描かれている。またマドリッドの97—98頁の下段の半分は、260日周期の占星暦で占められているが、いくつか細区分された神々のうち8神はトウモロコシの神とB神で、それぞれイクの記号をもち、そこからはトウモロコシの穂が生育している(図11—14)。

このようにT字型をなすイクの記号は、マヤの図像では、B神やトウモロコシと密接な関係を有していることがわかるが、イクはマヤ語では風とか息を意味する語でもあり、それから発展して、生命そのものを意味する。(Thompson 1970, p. 73)。

H. Spinden は(Spinden 1957, p. 47), T字型の記号は、ジャガー神の口の形から発生したという説を提唱し、コパンの神殿11号の“象形文字の段階”に刻まれた人物像にある一連の胸飾りから、そのことを例証しようとする(図11—15)。アンデスでもT字型のマークはジャガーの顔面の一部を抽象化した記号となっている(Kano 1979, 狩野 1979)。

5) 花 弁 型 (Kin sign)

マヤではこの記号はキン (Kin) と呼ばれ、一般に暦の一日の単位とか太陽を意味している。この象形文字のシンボリックな形態は、太陽神を表わす文字の主要素として用いられている (図11—10, 表XVII—10)。石碑類では太陽神を、あるいはその神の属性や職能を表象するために、額の箇処や耳飾り、頭飾りの中に置かれている (図11—5—9)。またX字型の項で説明した三つ組のシンボルにもよく付随している (図11—11)。このほかヤシュキン (Yaxkin) の月の象形文字にもこの記号は主要素として表示されている (Thompson 1971, Fig. 17—1—10)。

象形文字としてのキンの記号にはまた接尾辞として、水流のような形のものが付随しているけれども、それは太陽の光線を様式化したものと考えられている (Thompson 1970, p. 142)。

暦の導入文字には、キンの記号を示すのに三種類の頭像が当てられているが、キンの記号がもつとも容易に認識できるのは、太陽神そのものの図像である。この神の顔の特徴は長い鼻あるいはローマ鼻で、前者はB神 (図11—5)、後者はD神 (図11—6—9) に該当する (Spinden 1957, pp. 61—76)。石碑ではしばしばキンのシンボルを付した頭部からトウモロコシが発生している。眼には円形と方形の二種があり、瞳孔は水のシンボルである渦文で表現されている。また両神ともよく口の中央部からT字型の門歯が突出している。ときに舌の先端が二つに分岐しているのは、ヘビの特性を象徴するものであろう。

太陽神の頭像には、よくヒスイとか貝の耳飾りが吊るされており、また頬には不整形な三日月形のシンボルが付されている。ドレスデン・コデックスではG神の眼窩、腕、背中あるいは腰の箇処などに多数のキンの記号が施されている。したがってこの神も先のB神、D神と同一の神で、それぞれ別の局相を表わしているものと解することができる (Spinden 1975, p. 75)。

このほかキンの記号は、黒を表示する挿入辞としても用いられているが、それには犬とかジャガーの頭像が付随しており、これは神話のテーマを表現したものと考えられる。またヤシュチランの楣48号の図像では、サルに伴って出現している (図11—12)。サルと太陽とはアステカでは密接な関係を有している。アステカでは太陽神は歌や音楽の守護神でもあって、また太陽神の祭りに当たる日はショチトリ (Xochitli) と呼ばれ、花によって象徴されているが、その仮装行列では人々はサルに変装した。マヤ地域でも太陽神は詩と音楽の守護神でもあり、また花とも関係があった。

このようにキンの記号は花を様式化したシンボルで、太陽神自身の肖像とかサルやジャガー、犬などと結びついて表示されたが、これら種々の異形形態をもつことは、象形文字がいかに深く神話に根ざしていたものであるのかをよく例証している。

6) 渦 文 型

第15番目のムアン (Muan) の月の象形文字は、通常 Moan Bird と称するミミズクの頭像で表記され、“驟雨”を意味している (Thompson 1960, p. 275)。これと同種の鳥の図像はオルメカのサン・ロレンソの巨石頭像2号 (図5—12) やテオティワカンの雨の神トラロックの頭飾り (Covarrubias 1957, p. 123)、更にサポテカの象形壺などにも共通に認められる。そしてドレスデン・

コデックスではムアンの月を表わすシンボルとして、円形の枠の中に先端のカーブした小渦文をおさめた記号を用いている(表 XVIII—3, 8)。この渦文は先述したイサパ様式の神像の瞳孔としてよく現われているが、マヤでもコパンやパレンケの石碑の主題となっているB神(長い鼻の神)やD神, K神の眼の中にも水のシンボルとしてしばしばみられる(図11—17~20)。

7) 円または小円

マヤでは円と小円はヒスイのシンボルであるが、またムルク(Muluc)の月を表わす象形文字となっている(表 XVIII—5)。ムルクは水の日に対応するが、ヒスイは中米では貴重な物質の代名詞であり、雨や水と同一視されていた。ムルクの日の守護神はショク(Xoc)という魚神であったが、これに対応するシンボルもまたヒスイの記号で表象された。石碑の図像に於ては、先述したように、円はよく三個のものが組み合わされて、神像の口辺や胴部に表現されるが、それは神の属性を示すシンボルとして用いられているもので、また獣神像の場合には、よくU字型のシンボルに近接した箇処に付されている(図9—15)。

小円は周囲を円環で囲まれるとモル(Mol)の月である雨雲を表わす記号に変わる(表 XVIII—6, 7)。また暦の360日を表わすトゥン(Tun)の記号の一つの要素にもなっている。このトゥンはユカテカ語ではヒスイとか宝石一般を意味する言葉である(Thompson 1971, p.144)。そしてトゥンの最も一般的な象形文字は、フクロウまたはミミズクの頭像で表わされており、これもまた水と密接な関係をもつことは先述した通りである。

8) チクチャンの記号(図10—21, 表XVIII—8, 9)

楕円形の枠の中に二本の短線あるいは2点を配合した記号は、サポテカやイサパのシンボルの中にも現われていたが、マヤではチクチャン(Chicchan)の日の記号として用いられている。またその頭像型式の象形文字は上述の鳥とかあるいはカメで表わされている(Thompson 1971, Fig. 7—1~3, 5, 6, 8)。

チクチャンとはマヤの Choltei (Chorti) 族の間では重要なヘビ神の名称で、大蛇とか翼蛇(竜)の形をとっている。この神は四つの局相をもち、それぞれ宇宙の四方向に住むとされている(Thompson 1971, p.75)。また地上では山とか川、湖の中にも住むと考えられている(Wisdom 1940, pp.392—97)。またイシル族とキチェ族の暦でも、この日はヘビの日に該当している(Schultz Jena 1946, p.35)。

チクチャンのシンボリックな記号は、接辞としてのヤシュ(たとえばヤシュ・キンのときの)の記号と非常によく似ており、また部分的には同義語として相互に交換可能な要素となっている。事実、チクチャンのヘビ神はまた9の数の守護神でもあるが、この神の頭像型式の象形文字には、シンボルとしてヤシュの記号が付され、チクチャンと同じ神の属性を表示している(Thompson 1971, Fig. 13—17, 18)。また先述のヤシュチランの石碑7号では、様式化された水流の図案の中にカン十字と一緒に現われている(図11—3)。したがってチクチャンの記号は水のシンボルと見做して差し支えないであろう。

9) 菱 形

マヤではラマト (Lamat) の日の文字は菱形に四点を配した記号で表記されたが、これは金星を表わすシンボルでもある (表 XVIII—10~12)。竜神の体部にはよくこのシンボルが付されている。オルメカでも土器や石偶の装飾にこの記号は存在している (図 1—5)。金星は暦の上でも重要な役割を果たしているが、「明けの明星」と「宵の明星」としての二面性をそなえ、神話のテーマとしても太古の時代から登場していたものと考えられる。

このほか、オルメカからイサパを通じてマヤに継承された重要なシンボルに五ツ目型の記号 (quincunx) がある (図10—1, 16)。図像の上ではよく装身具の一部や耳飾りとして表現されているが、太陽、金星、火の神などのシンボルのほか、第五番目の太陽界、宇宙の中心など諸原理の統合体としてのさまざまな思想を内包しており、マヤばかりでなく、中米の古代文化全般を通じて、極めて重要な性格をもつ記号である。これについては別稿であらためて論じることにした。

結 論

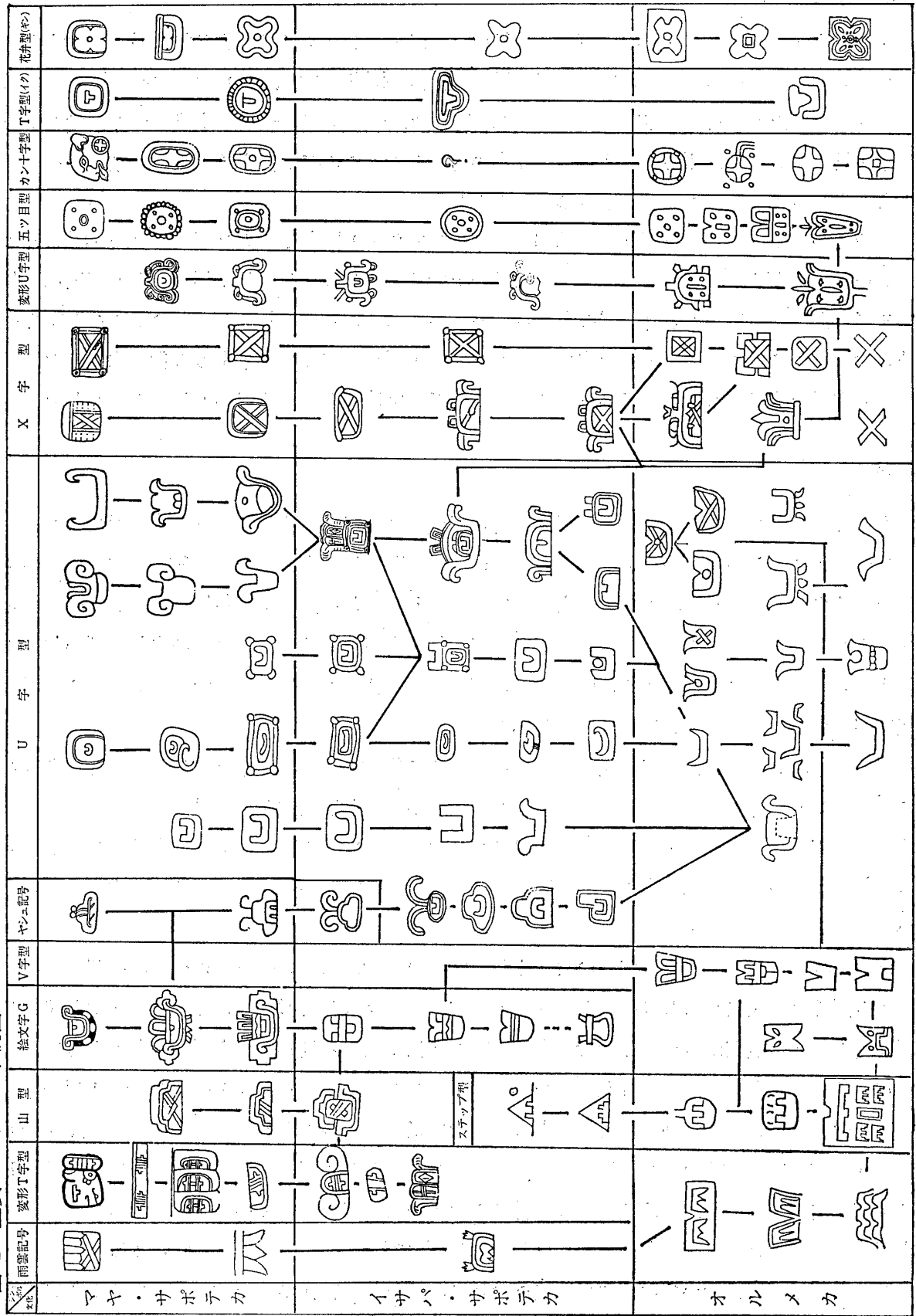
本稿では、メソアメリカの先古典期から古典期にかけて出現する主なシンボルを対象として、それらがオルメカからイサパを通じてマヤへどのような形で伝達され、また如何なる図像構成の中へと組み込まれていったか、ということについて考察した。その間、イサパ様式においては、テオティワカンやサポテカのシンボルも部分的に吸収され、究極的にはすべてマヤの宗教や暦の体系にとり入れられて、メソアメリカに於ける唯一の高度な文字体系として結実した。諸シンボルの系統や相関関係については、まとめて図12に表示した。

ところで、シンボルは本来、複雑な神々の属性や職能を識別したり選別するために考案されたものであることは解るにしても、図像学的にみて、そのような抽象的な諸記号が、当初、オルメカに於てどのようなイメージを原型として創出されたのか、という点については、十分に解明されていない。そこで最後にこの問題について若干の考察をめぐらして、結論とすることにした。

U字型のシンボルは、ジャガーの大きく開いた口の形や、あるいはジャガー人間の部厚い唇とか上顎の簡処を様式化したものと考えられる。またオルメカの芸術では、よくジャガーの洞窟と関係づけて表現する慣例がみられるので、とくに巨石頭像や祭壇に描かれた大型の湾曲したU字型は、洞窟をイメージとして案出されたものであるかもしれない。イサパやマヤに現われる小型の扁平なU字型は、ジャガーとは別に、月や貝との関連性を指摘する説もある (Thompson 1960, p. 232, 278; Coe 1965, P. 759)。尚、U字型の文様はアンデスの形成期に、オルメカと平行的に発達したチャビン文化に於ても、やはりジャガー神のシンボルとして出現している。この場合は、写実的に表現されたジャガー人間の図像を原型としている (狩野 1979, 1980, Kano 1979)。

V字型、Y字型については、すでに述べた通り、それぞれ神像の特徴的な部分をそのままシンボルの形態に採用したものである。またステップ型については、おそらく雨雲の様式化から発生した

図12 主要シンボルの系統図



＜メソアメリカに於けるシンボルの諸体系＞

と想定されるのであるが、確かなことはつかめない。ただこの型はV字型のシンボルと合成され、後にサポテカの水のシンボルである絵文字Cの原型となった可能性は十分に考えられる。

X字型のシンボルはヘビとかワニの体部によく付随して現われている。イサパやマヤに於ても同様である。オルメカの石斧に刻まれた小型の神像では、牙が上部から二本だけ突き出したものと、上下に噛み合うように交差した形で四本の牙を表現したものとがある。後者の場合はいずれの牙も先端が二つに分岐しており、ヘビの特性を象徴している。また口の周囲は別の方形の枠で囲まれているが、その枠は三箇所ないし四箇所が切断された独特の形をなし、それ自身も洞窟か何かを様式化したものと思われる。他方、土器の装飾としてもジャガーの顔面を様式化した図案があり、そこでは口の中にX字型のシンボルをおさめ、周囲はやはり同種の方形の枠で囲んである。このような図像上の特殊な共通性からみて、X字型のシンボルは、おそらく交差したヘビの牙を原型として考案されたものと推定される（図3—11参照）。

花弁型はマヤでは太陽神のシンボルとなっているが、オルメカでもジャガー神と関係のある図像に伴って出現している。原型は実際の花をモデルとして、それを様式化したものと推定されるが、月の形象とも結びついているところをみると、太陽と月に関連した神話のモチーフから生まれたシンボルと解釈される。

十字型のシンボルは、メソアメリカの古代民のすべてに浸透していた「生命樹」または「世界樹」の観念との関連性を考慮すべきであろう。マヤではパレンケの神殿に、この樹木を象徴する見事な十字形の浮き彫りがある。オルメカの本拠地のラ・ベンタでは、ヒスイの石斧を敷き並べた特殊な配石遺構が発見され、一部は原位置からずれてしまっていたとはいえ、もとは十字形に配置されてあったことが確認されている（Coe 1970, p.9, Fig.7）。またこの遺構の基部には、凹面鏡が置かれてあった。鏡はオルメカではジャガーと密接な関連を有し、またアステカでもジャガー神であるテスカトリポカの重要なシンボルとなっていた（狩野, 1982, pp.192—193）。更に重要なことは、テスカトリポカは四つの局相をもち、宇宙の四界を支配していた神であり、また「生命樹」の観念も本来そのような神々の威力の象徴であった、ということである。

事実、オルメカに於ても奉献石斧に「生命樹」を描いた例がある（図6—4）。この場合はジャガーの頭飾りとして、V字型のシンボルが十字形に配置されている。いずれにしても、十字型は「生命樹」を抽象化したシンボルであると判断される。マヤでも首長やジャガーの頭飾りのシンボルとしてよく出現していた。

このほかシンボルを囲む円形や方形の四隅に点を配合する手法も、オルメカからはじまって広くメソアメリカに普及していくが、これ自体も上述した神々の観念とか宇宙観を象徴したものと考えられる。この原型は、ジャガーの口で洞窟を表現したチャルカツィンゴの浮き彫り像にあると思われる。この場合、ジャガーの口または洞窟の四隅には、四つの植物文様が配置されている。またラ・ベンタの祭壇4号にも同種のモチーフが表現されている（図3—8）。

五つ目型のシンボルも図像的には様式化されたジャガーの顔面像からの抽象化によって派生した

ものと考えられるが、シンボルの性格としては、やはり宇宙の四界とその中心を支配する神の観念を象徴したものと推定される。

最後にU字型とX字型とを合成したシンボルや、またそれぞれを左右の眼の中や額の箇処に対称的に配置してあるのもやはり特別な意味をもつものと考えざるを得ない。これは単純にみると、U字型はジャガーをX字型はヘビやワニなどの属性を表示したものと受けとれるけれども、更に深くみると、メソアメリカの太古の創造神の二元性を象徴したものとも考えられる。アステカやマヤの神話に登場する最初の創造神は、一神でありながらも男女の両性をそなえ、火と水を司る神であった。この場合、男性は天空、女性は大地で、両者の神秘的な交渉によって世界に生命が誕生したのであった。この神話の起源については未だ不明であるが、オルメカの時代につくられた可能性はある。

以上、オルメカのシンボルの由来について、種々、考察したわけであるが、メソアメリカの古代芸術に現われるさまざまなシンボルは、単に神々の属性や職能を象徴しているばかりではなく、独特の複雑な神話の体系や宇宙観をもその根底に深く秘めていることがわかる。

今回は主にシンボルの図像学的な面に重点を置いて考究したわけであるが、これはむしろ基礎的な作業であり、次回は更に発展して、神話や神々の体系とシンボルとの関係について追求してゆく所存である。

注

- 1) この点はすでに Covarrubias (1942, p.49); Drucker (1952, p.181); Coe (1965, p.756); Bernal (1969, pp.96—97) などによって指摘されていたが、近年の資料の増加に伴い、いっそう確実視されるようになった。
- 2) 例えば God I はジャガー・ドラゴン神、God II はトウモロコシ神、God VII はケツァルコオアトル(翼蛇)神などローマ数字によって10神に大別し、更にアルファベットで20神に細分している。
- 3) 確かにオルメカの図像の中には、ジャガーのほかにもヘビ、ワニ、コンドルなど、他の動物や鳥類の特性も混入しているし、火の神、シベ神、ケツァルコオアトルに比定できる神々も存在していたかのように見受けられる。しかし、オルメカ文化が当初からこのように多神教的な宗教体系を備えていたのかどうかは疑問である。また神々の職能についても明確には識別されていない。暦の体系についても、現在のところオルメカよりもサポテカの方が年代的には古い。
- 4) 当時の交易にかかわる流通機構として、六種類の通商網が指摘され、それぞれのネットワークは別々の条件や目的のもとに操作され、高度に統御された市場体制がしかれていたと説かれている。
- 5) 例えば、ラ・ベンタの遺跡からは、ヒスイの石斧、石偶、赤鉄鉱、磁鉄鉱の鏡などが大量に出土しているが、アローヨ・ペスケーロの貯蔵穴からは、25個の実物大のヒスイの仮面と約1,000点にのぼるヒスイと蛇紋岩の奉献石斧が発見されている (Coe 1977, p.192)。
- 6) トラティルコにオルメカの要素の出現するのは、先古典期の中頃で、500B.C.以前には遡らないと見做されていた。またサカテコ、エル・アルポリージョエI期など、これまでメキシコ河谷で最古の層とされていた文化は、逆に新しいことが判明してきたが、このような編年上の誤りから、種々の混乱が生じていた。
- 7) 先述したように、最近、一部の研究者の間からは、オルメカ芸術におけるジャガーのモチーフは、これまであまりにも強調されすぎていた、という批判が高まってきている。例えば、頭部のV字型の切り込み、

＜メソアメリカに於けるシンボルの諸体系＞

- 爪の生えた手，火焰型の眉，上方または前方へ突出した唇，交差した牙などはジャガーではなく，ワニの特徴を表現したものであろうと提言されている (Coe 1977, Stocker et al. 1980)。
- 8) 彼の説によると，メソアメリカの原古典期から初期古典期にかけては，オルメカのジャガー神像が一段と普及して，各地で雨の神として，さまざまな形で受容されるが，図像的には次第に変貌して，マヤ地域では竜神となる，と述べられている。
 - 9) モンテ・アルバンⅢ期 a では，絵文字 C は大地の神であるワニのチラ神 (Chila) のシンボルであるとされている (Paddock 1970, p.259)。しかしジャガーとワニとは図像の上では区別しがたい。一般に絵文字 C を伴う象形壺は，オアハカ地方の雨の神コシホ (Cocijo)，あるいはシベ神 (Xipe) に付随している場合が多い。
 - 10) モンテ・アルバンの103号墳では，首長の葬送儀礼の様子が，模型によって復原されていた。そこでは，テオティワカンの太古の“火の神”の像が安置され，亡き王を象徴する巨石頭像がピラミッドの上に祀られて，周囲には儀式用の衣裳をまとった神官たちがはべり，円盤状の鏡を太陽にかざしている姿が描写されている。またこの儀式には，音楽を奏でる楽士たちも参加している (Paddock 1970, Fig. 151)。
 - 11) Thompson によると，マヤの文字体系にはおよそ350の主辞 (主記号) と 370 の接辞 (主辞の前後，上下，あるいは中に付随しており，形容詞，副詞，前置詞などに相当すると思われる)，それに約100個の神々を表わす頭像文字が含まれている。このうち頭像文字とまた主辞と接辞の記号の変種や重複を削減すると，マヤの文字は全部で約 650 個ほどの数に落ち着く。しかし，それらの文字の諸要素は相互に組み合わせられて，実際には，はるかに多数の複合語を合成しているといわれる (Thompson 1960, 1972)。
 - 12) Diego de Landa の「アルファベット表」にある U 字型記号は「～の」という所有格，英語の of に相当する語である (Thompson 1960, p.46) といわれるが，実際にはさまざまな文脈の中に現われており，とくに水のシンボルとして表記されているケースが多いようである。
 - 13) マヤの接辞は，とくに接頭語として使用される場合には，形は異なっても本質的に意味の等しい語は，相互に交換可能であるとされている (Thompson p.40, 276)。

引用ならびに参考文献

Agrinier, P.

1960 The Carved Human Femurs from Tomb 1, Chiapa de Corzo, Chiapas, Mexico. Papers of the New World Archaeological Foundation, No.5 Orinda, California.

Bernal, I.

1969 The Olmec World. University of California Press, Berkeley.

1974 Corpus Antiquitatum Americanensium, México VII; Bajorrelieves En El Museo De Arte Zapoteco De Mitla, Oaxaca. Instituto Nacional de Antropología e Historia, México.

Blanton, R. E., S. A. Kowalewaki, G. Feinman and J. Appel

1981 Ancient Mesoamerica: A comparison of change in three regions. Cambridge University Press, London.

Boggs, S. H.

1950 "Olmec" Pictographs in the Las Victorias Group, Chalchuapa Archaeological Zone, El Salvador. Notes on Middle American Archaeology and Ethnology, No. 99, pp.85-92. Carnegie Institution of Washington, Cambridge.

Brush, C. F.

1965 A Contribution to the Archaeology of Coastal Guerrero, Mexico. Ph. D. dissertation, Department of Anthropology, Columbia University, New York.

Brush, E. S.

狩野千秋

- 1968 The Archaeological Significance of Ceramic Figurines from Guerrero, Mexico. Ph. D. dissertation, Department of Anthropology, Columbia University Press, New York.
- Caso, A.
- 1965a Sculpture and Mural Painting of Oaxaca. In Handbook of Middle American Indians, Vol. 3, pp. 849-870. University of Texas Press, Austin.
- 1965b Zapotec Writing and Calendar. In Handbook of Middle American Indians, Vol. 3, pp. 931-947. University of Texas Press, Austin.
- Caso, A. and I. Bernal
- 1965 Ceramics of Oaxaca. In Handbook of Middle American Indians Vol. 3, pp. 871-895. University of Texas Press, Austin.
- Codex Dresdeniensis
- 1932 A Pre-Columbian Maya Codex in the National Museum of Archaeology, Madrid. Photographed and Published by Leo Rosny. Paris.
- Codex Peresianus (Codex Paris)
- 1968 Reproduction of the Original Codex in the Bibliothèque National, Paris. Graz.
- Codex Tro-Cortesianus (Codex Madrid)
- 1968 Reproduction of the Original Codex in the Museo de America, Madrid. Graz.
- Coe, M. D.
- 1965a The Jaguar's Children: Pre-Classic Central Mexico. The Museum of Primitive Art, New York.
- 1965b Archaeological Synthesis of Southern Veracruz and Tabasco. In Handbook of Middle American Indians, Vol. 3, pp. 679-715. University of Texas Press, Austin.
- 1965c The Olmec Style and its Distribution. In Handbook of Middle American Indians, Vol. 3, pp. 739-775. University of Texas Press, Austin.
- 1968 San Lorenzo and the Olmec Civilization. In Dumbarton Oaks Conference on the Olmec (Elizabeth P. Benson, ed.), pp. 41-78. Dumbarton Oaks Research Library and Collection. Washington.
- 1970 The Archaeological Sequence at San Lorenzo, Tenochtitlan, Veracruz, Mexico. In Contributions of the University of California Archaeological Research Facility, No. 8. Berkeley.
- 1972 Olmec Jaguars and Olmec Kings. In the Cult of the Feline (Elizabeth P. Benson ed.), pp. 1-18. Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington.
- 1977 Olmec and Maya: A Study in Relationships. In The Origins of Maya Civilization (R. E. W. Adams ed.), pp. 183-195. University of New Mexico Press, Albuquerque.
- Coe, W. R.
- 1965a Tikal: Ten Years of Study of a Maya Ruin in the Lowlands of Guatemala. Expedition 8, pp. 5-56. The University of Pennsylvania, Philadelphia.
- 1967 Tikal: A Handbook of the Ancient Maya Ruins. The University Museum, The University of Pennsylvania, Philadelphia.
- Cook de Leonard, C.
- 1967 Sculptures and Rock Carvings at Chalcatzingo, Morelos. Contributions of the University of California Archaeological Research Facility, No. 3, pp. 57-84. Berkeley.
- Covarrubias, M.
- 1964a Mexico South: the Isthmus of Tehuantepec. New York.
- 1946b El arte "Olmeca" o de La Venta. Cuadernos Americanos, Vol. XXVIII, No. 4, pp. 153-179.

＜メソアメリカに於けるシンボルの諸体系＞

- México.
- 1957 Indian Art of Mexico and Central America. New York.
- Drucker, Ph.
- 1952 La Venta, Tabasco: a Study of Olmec Ceramics and Art. Bureau of American Ethnology, Bulletin 153. Washington.
- Drucker, Ph., R. F. Heizer and R. Squier
- 1959 Excavations at La Venta, Tabasco, 1955. Bureau of American Ethnology, Bulletin 170. Washington.
- Ekholm, S. M.
- 1969 Mound 30A and the Early Preclassic ceramic sequence of Izapa, Chiapas, Mexico. Papers of the New World Archaeological Foundation, No. 25. Brigham Young University Press.
- Flannery, K. V.
- 1968 The Olmec and the Valley of Oaxaca: A Model for Interregional Interaction in Formative Times. In *Dumbarton Oaks Conference on the Olmec* (Elizabeth P. Benson ed.), pp. 79-110. Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington.
- Flannery, K. V., A. V. Kirkby, M. J. Kirkby, and A. W. Williams
- 1967 Farming Systems and Political Growth in Ancient Oaxaca, Mexico. *Science* 158, pp. 445-454. Washington.
- Gay, C. T.
- 1966 Rock Carvings at Chalcatzingo. *Natural History*, Vol. LXXV, No. 7, pp. 5-61. New York.
- 1967 Oldest Paintings of the New World. *Natural History*, Vol. LXXVI, No. 4, pp. 28-35. New York.
- 1972 Xochipala: The Beginnings of Olmec Art. Princeton University Press, New Jersey.
- Graham, J. A., R. F. Heizer, and E. M. Shook
- 1978 Abaj Takalik 1976: Exploratory Investigations. In *Contributions of the University of California Archaeological Research Facility* 36, pp. 85-109. Berkeley.
- Griffin, G. G.
- 1972 Xochipala, the Earliest Great Art Style in Mexico. *Proceedings of American Philosophical Society* 116, pp. 301-309. Philadelphia.
- Grove, D. C.
- 1968a Chalcatzingo, Morelos, Mexico: a Reappraisal of the Olmec Rock Carvings. *American Antiquity*, Vol. 33, No. 4, pp. 486-491. Salt Lake City.
- 1968b Murales Olmecas en Guerrero. *Boletín del Instituto Nacional de Antropología e Historia*, No. 34, pp. 11-14. México.
- 1969 Olmec Cave Paintings: Discovery from Guerrero, Mexico. *Science*, Vol. 164, No. 3878, pp. 421-423. Washington.
- 1970 The Olmec Paintings of Oxtotitlan Cave, Guerrero, Mexico. *Studies in Pre-Columbian Art and Archaeology*, No. 6. Dumbarton Oaks, Washington.
- Grove, D. C., K. G. Hirth, D. E. Bugé, and A. M. Cyphers
- 1971 An Olmec Stela from San Miguel Amuco, Guerrero. *American Antiquity*, Vol. 36, pp. 95-102. Salt Lake City.
- 1976 Settlement and Cultural Development at Chalcatzingo. *Science* 192, pp. 1203-1210. Washington.
- Henderson, R. N.

狩野千秋

- 1972 *The King in Every Man*. Yale University Press, New Haven.
- Jimenes Moreno, W.
1970 *Mesoamerica before the Toltecs*. In *Ancient Oaxaca* (J. Paddock ed.), pp.1-77, Stanford University Press, Stanford, California.
- Joralemon, P. D.
1971 *A Study of Olmec Iconography*. *Studies in Pre-Columbian Art and Archaeology*, No.7. Dumbarton Oaks, Washington.
- Kano, C.
1979 *The Origins of the Chavín Culture*. *Studies in Pre-Columbian Art and Archaeology*, No.22, Dumbarton Oaks, Washington.
- 狩野千秋
1979 「プレ・チャビン期における猫科動物の形象について」『三上次男博士頌寿記念論集』pp.401-429, 三五堂, 東京.
1980 「新大陸の猫神儀礼とシャーマニズム」『民族学研究』Vol.44-4, pp.366-392, 東京.
1982 「新大陸の鏡」『考古学研究室研究紀要』第1号, pp.167-198. 東京大学文学部考古学研究室.
- Kidder, A. V., J. D. Jennings, and E. M. Shook
1946 *Excavations at Kaminaljuyú, Guatemala*. Publication 561, Carnegie Institution of Washington, Washington.
- Kidder, A. V.
1947 *The Artifacts of Uaxactún, Guatemala*. Publication 576, Carnegie Institution of Washington, Washington.
- Kubler, G.
1969 *Studies in Classic Maya Iconography*. *Memoirs of the Connecticut Academy and Science*, Vol.18. Connecticut.
- Leigh, H.
1970 *The Evolution of the Zapotec Glyph C*. In *Ancient Oaxaca* (J. Paddock ed.), pp.256-269. Stanford University Press, Stanford.
- Lowe, G. W.
1962 *Mound 5 and Minor Excavations, Chiapa de Corzo, Chiapas, Mexico*. *Papers of the New World Archaeological Foundation*, No.12, Brigham Young University, Provo.
1975 *The Early Preclassic Barra Phase of Altamira, Chiapas: A Review with New Data*. *Papers of the New World Archaeological Foundation*, No.38, Brigham Young University, Provo.
1978 *Eastern Mesoamerica*. In *Chronologies in New World Archaeology* (R. E. Taylor and C. W. Meighan ed.), pp.331-393. Academic Press, New York.
- Lowe, G. W., and J. A. Mason
1965 *Archaeological Survey of the Chiapas coast, highlands and upper Grijalva Basin*. In *Handbook of Middle American Indians*, Vol.2, pp.195-236, University of Texas Press, Austin.
- Mathews, P.
1980 *Notes on the Dynastic Sequence of Bonampak, Part 1*. In *Third Palenque Round Table*, 1978, Pt.2 (M. G. Robertson ed.), pp.60-73. University of Texas Press, Austin.
- Maudslay, A. P.
1889-1902 *Archaeology*. *Biologia Centrali-America*. Text and 4 Vols, London.
- McDonald, A. J.

〈メソアメリカに於けるシンボルの諸体系〉

- 1977 Two Middle Preclassic Engraved Monuments at Tzutzuculi on the Chiapas Coast of Mexico. *American Antiquity*, Vol. 42, pp.560-566. Salt Lake City.
- Medellín Zenil, A.
- 1960 Ceramics del Totonacapán: Exploraciones en centro de Veracruz. Instituto de Antropología Universidad Veracruzana, Veracruz. Xalapa.
- Miles, S. W.
- 1965 Sculpture of the Guatemala-Chiapas Highlands and Pacific Slopes and Associated Hieroglyphs. In *Handbook of Middle American Indians*, Vol. 2, pp.237-275. University of Texas Press, Austin.
- Morris, F. H., J. Charlot, and A. A. Morris
- 1931 The Temple of the Warriors at Chichen Itzá, Yucatan. Publication 406, 2vols, Carnegie Institution of Washington, Washington.
- Navarrete, C.
- 1960 Archaeological Exploration of the Frailesca, Chiapas, Mexico. *Papers of the New World Archaeological Foundation*, No.7. Orinda, California.
- 1974 The Olmec Rock Carvings at Pijijiapan, Chiapas, Mexico and Other Olmec Pieces from Chiapas and Guatemala. *Papers of the New World Archaeological Foundation*, No.35. Brigham, Young University Press, Provo.
- Niederberger, C.
- 1976 Zohapilco, Cinco Milenios de Ocupación Humana en un Sitio de la Cuenca de México. Departamento de Prehistórica, Colección Científica No.30, Instituto Nacional de Antropología e Historia. México.
- Norman, V. G.
- 1973 Izapa Sculpture: Part 1, Album. *Papers of the New World Archaeological Foundation*, No. 30. Brigham Young University Press, Provo.
- Paddock, J.
- 1970 Oaxaca in Ancient Mesoamerica. In *Ancient Oaxaca* (J. Paddock ed.), pp.87-240. Stanford University Press, Stanford, California.
- Parsons, L. A., and P. S. Jenson
- 1965 Boulder Sculpture on the Pacific Coast of Guatemala. *Archaeology* 18(2): pp.132-144.
- Parsons, L. A., and B. J. Price
- 1971 Mesoamerican Trade and Its Role in the Emergence of Civilization. In *Observations on the Emergence of Civilization in Mesoamerica* (R. F. Heizer and J. A. Graham ed.), Contributions to the University of California Archaeological Research Facility, No.11. Berkley.
- Pijoan and Soteras, J.
- 1946 Arte Per-Colombino: Mexicano Y Maya. In *Summa Artis, Historia General del Arte*, Vol. 10. Madrid.
- Piña Chan, R.
- 1958 Tlatilco. 2vols. Instituto Nacional de Antropología e Historia, México.
- Piña Chan, R. and L. Covarrubias
- 1964 El Puddlo del Jaguar (Los Olmecas Arqueológicos). Consejo para la planeación e instalación del Museo Nacional de Antropología, México.
- Pires-Ferreira, J. W. and K. V. Flannery

狩野千秋

- 1976 *Ethnographic Models for Formative Exchange. In the Early Mesoamerican Village* (K. V. Flannery ed.), pp. 286-292. Academic Press, New York.
- Porter, M.
- 1953 *Tlatilco and the Pre-Classic Cultures of the New World. Viking Fund Publications in Anthropology No. 19.* New York.
- Porter Weaver, M.
- 1981 *The Aztecs, Maya, and Their Predecessors: Archaeology of Mesoamerica.* Academic Press, New York.
- Proskouriakoff, T.
- 1946 *An Album of Maya Architecture. Publication 558, Carnegie Institution of Washington, Washington.*
- 1950 *A Study of Classic Maya Sculpture. Publication 593, Carnegie Institution of Washington, Washington.*
- 1968 *Olmec and Maya Art: Problems of Their Stylistic Relation. In Dumbarton Oaks Conference on the Olmec* (E. P. Benson ed.), pp. 119-142. Dumbarton Oaks Research Library and Collection. Washington.
- Quirarte, J.
- 1973 *Izapan Style Art: A Study of Its Form and Meaning. Studies in Pre-Columbian Art and Archaeology, No. 10. Dumbarton Oaks, Washington.*
- 1976 *The Relationship of Izapan Style Art to Olmec and Maya Art: A Review. In The Origins of Religious Art and Iconography in Preclassic Mesoamerica* (H. B. Nicholson ed.), pp. 73-86. Latin American Center, Los Angeles.
- 1977 *Early Art Style of Mesoamerica and Early Classic Maya Art. In The Origins of Maya Civilization* (R. E. W. Adams ed.), pp. 249-283. University of New Mexico. Albuquerque.
- Robicsek, F.
- 1975 *A Study in Maya Art and History: The Mat Symbol. The Museum of the American Indian, Heye Foundation, New York.*
- Roys, R. L.
- 1933 *The Book of Chilam Balam of Chumayel. Publication 438, Carnegie Institution of Washington, Washington.*
- Ruz Lhuillier, A.
- 1952a *Exploraciones Arqueológicas en Palenque, 1949. Anales del Instituto Nacional de Antropología e Historia, Vol. 4, No. 32. México.*
- 1952b *Exploraciones Arqueológicas en Palenque, 1950, 1951. Anales del Instituto Nacional de antropología e Historia, Vol. 5, No. 33. México.*
- 1954 *Exploraciones Arqueológicas en Palenque, 1952. Anales del Instituto Nacional de Antropología e Historia, Vol. 6, No. 34. México.*
- 1958 *Exploraciones Arqueológicas en Palenque, 1953, 1954, 1955, 1956. Anales del Instituto Nacional de Antropología a Historia, Vol. 10, No. 39. México.*
- Schavelzon, D.
- 1980 *Temples, Caves or Monsters?: Notes on Zoomorphic Facade in Pre-Hispanic Architecture. In Third Palenque Round Table, 1978, Pt. 2, pp. 151-162. University of Texas Press, Austin.*
- Schellhas, P.

＜メソアメリカに於けるシンボルの諸体系＞

- 1904 Representation of deities of the Maya manuscripts. Papers, Peabody Museum, Vol. 4, No. 1. pp. 7-47. Harvard University, Cambridge.
- Schultz Jena, L.
1946 La Vida y Las Creencias de los Indígenas Quiches de Guatemala. Publicaciones Especiales del Instituto Indigenista, I, Guatemala.
- Séjourné, L.
1966 La Pensée des Anciens Mexicains. Paris.
- Sharer, R. J.
1978 The Prehistory of Chalchuapa, El Salvador. 3vols. University of Pennsylvania Press, Philadelphia.
- Shook, E. M. and M. P. Hatch
1978 The Ruins of El Bálsamo, Department of Escuintla, Guatemala. Journal of New World Archaeology 3(1).
- Spinden, H. J.
1957 Maya Art and Civilization. The Falcons Wing Press, Colorado.
- Stirling, M. W.
1943 Stone Monuments of Southern Mexico. Bureau of American Ethnology, Bulletin 138. Washington.
1965 Monumental Sculpture of Southern Veracruz and Tabasco. In Handbook of Middle American Indians, Vol. 3, Pt. 2, pp. 716-738. University of Texas Press, Austin.
- Stocker, T., S. Meltzoff and S. Armsey
1980 Crocodilians and Olmecs: Further Interpretations in Formative Period Iconography. American Antiquity, Vol. 45, pp. 740-758. Salt Lake City.
- Tolstoy, P.
1975 Settlement and Population Trends in the Basin of Mexico, Ixtapaluca and Zacatenco Phase. Journal of Field Archaeology 2, pp. 331-349.
- Tolstoy, P. and L. I. Paradis
1971 Early and Middle Preclassic Culture of the Basin of Mexico. In Observations on the Emergence of Civilization in Mesoamerica (R. F. Heizer and J. A. Graham ed.), Contributions of the University of California Archaeological Research Facility, No. 11. Berkeley.
- Tolstoy, P., S. K. Fish, M. W. Boksenbaum, K. B. Vaughn and C. E. Smith
1977 Early Sedentary Communities of the Basin of Mexico. Journal of Field Archaeology, 4, pp. 91-106.
- Thompson, J. E.
1962 A Catalogue of Maya Hieroglyphs. University of Oklahoma Press, Norman.
1971 Maya Hieroglyphic Writing, (3rd. ed.). University of Oklahoma Press, Norman.
1972 Maya Hieroglyphs, Without Tears, British Museum Publications, London.
- Wisdom, C.
1940 The Chorti Indians of Guatemala. University of Chicago Publications in Anthropological and Ethnological Series, Chicago.
- Wicke, C. R.
1971 Olmec: An Early Art Style of Precolumbian Mexico. The University of Arizona Press, Tucson, Arizona.

The Symbol Systems of Mesoamerica

Before the appearance of writing in Mesoamerica, symbols with a religious significance had appeared. These symbols were of course devised by the Olmecs and they seem to have been used to symbolize the attributes and functions of the gods and at the same time as a means of distinguishing between the gods.

In Mayan culture also, a number of important signs which were included among the hieroglyphs often appear independently, attached to images of gods and to religious vestments and ceremonial objects. In these cases, it can be considered that they were performing some specific symbolic function, having been removed from the context of the calendar or inscriptions. These iconographic features surely follow the traditions of the Olmec styles and can be inferred to have been an intermediate culture; in particular, they were inherited by the Mayans through the Izapa style.

The themes or subjects of the symbols are tropical animals and birds, such as jaguars, snakes, crocodiles, owls, etc.; plants, such as corn; natural forces and phenomena, such as rain, water, fire, wind, thunder, storms; celestial bodies, such as the sun, the moon, Venus, etc. Intellectual associations or mythological themes linking the concept "precious" to rain and water and jade, etc. are also expressed through these symbols.

The basic composition principles of the symbols had already been regulated in the Olmec time. A realistic image was first dissolved into its component elements, and each element was then abstracted and transformed into a cipher-type geometric pattern. Next, the different, composite symbols would be newly created by making various combinations of the cipher-like elements.

Olmec symbols include the U-shape, the X-shape (the St. Andrew's cross or crossed bands), V-shape, Y-shape, stepped motifs, crosses, petal shapes, quincunx, rhomboids, circlets or circles and dots, spirals, etc. These symbols are attached to colossal heads, stone monuments, stela, altars, rock carvings, reliefs, masks, celts, figurines, ceramic wares, etc.

In the Izapa style, the number of symbols is limited compared to the Olmec style, but the symbols are more developed and formal in design and more decorative. As for the symbols inherited from the Olmecs, the U-shape and the X-shape are most common, and in the Izapa style these symbols are attached to compound creatures which combine the characteristics of felines and reptiles.

Olmec symbols were also incorporated in the Zapotecan style and are to be found in tumuli murals, in stelae, and in effigy urns of humans, animals, birds, etc.

In the Izapa and Zapotecan age, there were plentiful contacts with the Teotihuacan culture in the Valley of Mexico, and this led to appearance of various new kinds of symbols. Ultimately, these symbols were all absorbed by the Maya hieroglyphs, resulting in the creation of the only high-level glyph system in Mesoamerica.

The date, month, time, and numbers were all considered sacred by the Mayans, and each was linked with specific gods. In the case of the Mayans, most of the symbols created by the Olmecs were adopted as symbols to express calendar dates and each month. For example, the U-shape was used for the moon or as the symbol of the M god, the X-shape was the sign of the Uo month or was used in connection with the Dragon god (bird-serpent god) and the moan bird. The cross was called the Kan cross and was incorporated into the hieroglyph for Pop, the first month of the year, and was related to the Jaguar god. The T-shape was used as the glyph for the IK day and was the symbol of the long-lipped god or the B god. Besides these, the petal sign was used as the Kin sign and was the symbol of the Sun god; circles and circlets were the signs of the water day Muluc; the rhomboid was the symbol of Lamat day and was related to Venus.

The various abstract signs described above were devised by the Olmecs, but iconographically speaking we do not yet have an adequate understanding of the actual shape of the original images. This paper analyses the main symbols, such as the U-shape, the X-shape, the cross, the quincunx, etc., indicates their original shapes, then offers a hypothesis concerning the process by which they were transformed into abstract symbols.

シンボル表 I

シンボル	資料	出土地	様式	画像の種類				付帯箇所												文献					
				F	R	A	C	H	DE	EA	CO	PE	BE	AP	FO	SU	PU	NO	MO		LM	WI	CB	OT	
1	巨石頭像1号	San Lorenzo	Olmeca																						Bernal 1969, Pl.10 Wicke 1971, Fig.30
2	巨石頭像1号	La Venta	Olmeca																						Covarrubias 1957, Pl.XIV
3	祭壇5号	La Venta	Olmeca																						Drucker 1952, Fig.52
4	祭壇4号	La Venta	Olmeca																						Stiring 1943, Pl.37 Schávelzon 1980, Fig.2
5	石碑2号	La Venta	Olmeca																						Drucker 1952, Fig.49
6	記念物15号	La Venta	Olmeca																						Idem. Pl.64, Fig.54
7	巨石頭像2号	Tres Zapotes	Olmeca																						Stiring 1965, Fig.23 Wicke 1971, Fig.30
8	土器	Las Bocas	Olmeca																						Porter W, 1981, Pl.4-g Coc 1965a Fig.24
9	印章	Tlatilco	Olmeca																						Joralemont 1971, Fig.117
10	印章	Las Bocas	Olmeca																						Idem. Fig.134
11	土偶	Atlihuanayan	Olmeca																						Covarrubias 1957, Fig.21
12	土偶	Atlihuanayan	Olmeca																						Idem. Fig.21

省略記号： F-Feline (猫科動物) HD-Headress (頭飾り) AP-Apron (前垂れ) MO-Mouth (口) OT-Others (その他)
 R-Reptile (爬虫類) EA-Earplug (耳飾り) FO-Forehead (額) LM-Limbs (肢体) UN-Unknown (出土地不明)
 A-Avian (鳥類) CO-Collar (首飾り) SU-Supraorbital (眼窩上) WI-Wing (翼) CB-Ceremonial bar (笏杖)
 C-Compound creature(混合像) PE-Pectoral (胸飾り) PU-Pupil (瞳孔) IN-Inscription (碑文)

〈メソアメリカに於けるシンボルの諸体系〉

表II

	シンボル	資料	出土地	様式	図像の種類												文献								
					F	R	A	C	H	DEA	CO	PE	BE	AP	FO	SU		PU	NO	MO	LM	WI	CB	OT	
1		印章	Las Bocas	Olmeca	×																				Joralemon 1971, Fig.92
2		印章	Tlatilco	Olmeca	×																				Idem. Fig.77
3		土器	Tlatilco	Olmeca	×																				Covarrubias 1957, Fig.9
4		石製品	UN	Olmeca	×																				Joralemon 1971, Fig.124
5		石製品	UN	Olmeca	×																				Idem. Fig.124
6		仮面	UN	Olmeca	×																				Idem. Fig.153
7		仮面	UN	Olmeca	×																				Idem. Fig.153
8		石斧	UN	Olmeca	×																				Covarrubias 1957, Fig.33 Jovalemon 1971, Fig.172
9		浮き彫り	Chalcatzingo	Olmeca	×																				Coe 1965a, Fig.10 Jovalemon 1971, Fig.142
10		石碑6号	Cerro de las Mesas	Epi-Olmeca																					Covarrubias 1946, Pl.102
11		石碑2号	Izapa	Izapa																					Stirling 1943, Pl.49-b Quirarte 1977, Fig.10.5-b
12		石碑4号	Izapa	Izapa																					Quirarte 1977, Fig.10.5-a

表 III

OT

	シンボル	資 料	出 土 地	様 式	関連図像								付 属 箇 所								文 献																
					F	R	A	C	H	D	E	A	C	O	P	E	B	E	A	P		F	O	S	U	I	P	U	N	O	M	O	L	M	I	W	I
1		石碑3号	Izapa	Izapa					X																												Stirling 1943, Pl.50-a
2		石碑23号	Izapa	Izapa					X																											Miles 1965, Fig.12-d Quirarte 1977, Fig.10,4-f	
3		石碑10号	Izapa	Izapa					X																											Stirling 1943, Pl.56-b Miles 1965, Fig.12-c	
4		石碑5号	Izapa	Izapa					X																											Miles 1965, Fig.14	
5		土 器	Kaminaljuyú	Maya (Esperanza)				X														X													Kidder et al. 1946, Fig.97-a, 205-f		
6		土 器	Kaminaljuyú	Maya (Esperanza)				X														X														Idem. Fig.97-d, 205-f	
7		土 器	Kaminaljuyú	Maya (Esperanza)				X														X														Idem. Fig.97-b, 205-f	
8		土 器	Kaminaljuyú	Maya (Esperanza)				X														X															Idem. Fig.97-g, 204-b
9		石碑10号	Kaminaljuyú	Izapa (Miraflores)					X																											Miles 1965, Fig.3-a	
10		石碑10号	Kaminaljuyú	Izapa (Miraflores)					X																											Idem. Fig.3-b	
11		石碑10号	Kaminaljuyú	Izapa (Miraflores)					X																											Hammond 1982, Fig.4.13	
12		石碑10号	Kaminaljuyú	Izapa (Miraflores)					X																											Miles 1965, Fig.6-e	

〈メソアメリカに於けるシンボルの譜体系〉

表IV

	シンボル	資料	出土地	様式	関連図像										付帯箇処										文献	
					F	R	A	C	H	HD	EA	CO	PE	BE	AP	FO	SU	PU	NO	MO	LM	WI	CB	IN		
1		石碑23号	Izapa	Izapa				×																		Miles, 1965, Fig.12-d
2		石碑10号	Izapa	Izapa					×																	Idem. Fig.12-c
3		記念物2号	Kaminaljuyú	Izapa (Miraflores)				×																		Idem. Fig.4-a
4		石碑4号	Kaminaljuyú	Izapa (Miraflores)				×																		Idem. Fig.4-b, Pl.11-c
5		記念物2号	Kaminaljuyú	Izapa (Miraflores)				×																		Idem. Fig.4-a
6		シレット2	Kaminaljuyú	Izapa (Miraflores)				×																		Idem. Fig.8-e
7		石碑10号	Kaminaljuyú	Izapa (Miraflores)					×																	Idem. Fig.3-a
8		石碑10号	Kaminaljuyú	Izapa (Miraflores)						×																Idem. Fig.3-b
9		石碑11号	Kaminaljuyú	Izapa (Miraflores)																						Idem. Fig.15-a
10		石碑10号	Kaminaljuyú	Izapa (Miraflores)																						Hammond 1982, Fig.4.13
11		石碑10号	Kaminaljuyú	Izapa (Miraflores)																						Miles 1965, Fig.3-b
12		祭壇1号	Kaminaljuyú	Izapa (Miraflores)																						Idem. Fig.12-a

表V

	シンボル	資 料	出 土 地	様 式	関連図像										付 帯 箇 処										文 献
					F	R	A	C	H	HE	EA	CO	PE	BE	AP	FO	SU	PU	NO	MOLM	WI	CB	OT		
1		石碑11号	Kaminaljuyú	Izapa (Miraflores)	×																				Miles 1965, Fig.3-c
2		石碑11号	Kaminaljuyú	Izapa (Miraflores)	×																				Idem. Fig.15-a
3		石碑3号	Abaj Takalik	Izapa (Miraflores)	×																				Idem. Fig.3-g
4		石碑3号	Abaj Takalik	Izapa	×																				Idem. Fig.3-g
5		石碑2号	Abaj Takalik	Izapa		×																			Idem. Fig.9-a
6		石碑4号	Abaj Takalik	Izapa		×																			Quirarte 1977, Fig.10.3-c, 10.4-e
7		石碑1号	El Baul	Izapa	×																				Miles 1965, Fig.8-d
8		石碑1号	El Baul	Izapa	×																				Idem. Fig.8-b
9		石碑1号	El Jobo	Izapa	×																				Idem. Fig.15-b
10		石 鉢	Chiapa de Corzo	Izapa			×																		Quirarte 1977, Fig.10.7-d2
11		石碑41号	Monte Alban	Zapoteca	×																				Caso 1965a, Fig.8
12		土 器	Monte Alban	Zapoteca		×																			Paddock 1970, Fig.106

表VII










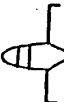
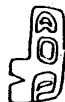

シンボル	資料	出土地	様式	関連画像			付帯箇所										文献								
				F	R	A	C	H	HE	EA	CO	PE	BE	AP	FO	SU		PU	NO	MOL	MI	CB	OT		
1	土器	Las Bocas	Olmeca	×	×																				Covarrubias 1957, Fig.29
2	石彫52号	San Lorenzo	Olmeca	×												×									Joralemon 1971, Fig.211
3	土器	Tlapacoya	Olmeca	×																					Joralemon 1971, Fig.120
4	石彫1号	Laguna de los Cerros	Olmeca	×													×								Bernal 1969, Pl.12
5	石斧	UN	Olmeca	×	×																				Covarrubias 1957, Pl.1VI Joralemon 1971, Fig.167
6	石斧	UN	Olmeca	×																					Covarrubias 1957, Fig.34
7	石斧	UN	Olmeca	×						×															Coe 1965a, Fig.5
8	石斧	Los Tuxtlas	Olmeca	×					×																Piña Chan and Covarrubias 1964, Fig.1, Joralemon 1971, Fig.177
9	石偶	Las Limas	Olmeca	×					×																Coe 1972, Fig.2 Joralemon 1971, Fig.206
10	石偶	Las Limas	Olmeca	×					×																Joralemon 1971, Fig.206
11	石彫52号	San Lorenzo	Olmeca	×																					Idem. Fig.211
12	石偶	Necaza	Olmeca	×																					Covarrubias 1946a, Fig.6

〈メソアメリカに於けるシンボルの諸体系〉

表四













	シンボル	資料	出土地	様式	関連箇所												文獻						
					F	R	A	C	H	HE	EA	CO	PE	BE	AP	FO		SU	PU	NO	MOL	MI	CB
1		土器	Tlapacoya	Olmeca	×																		Pina Chan and Covarrubias 1964, Pls. Joralemon 1971, Fig.237
2		土器	Tlapacoya	Olmeca	×																		Joralemon 1971, Fig.238
3		土器	Tlapacoya	Olmeca	?																		Idem. Fig.240
4		浮き彫り 5号	Chalcatzingo	Olmeca	×	×																	Cook de Leonard 1967, Pl.5, Fig.4
5		石碑30号	San Lorenzo	Olmeca	×	×																	Coe 1967, Fig.9
6		土器	Tlapacoya	Olmeca	×																		Joralemon 1971, Fig.69
7		祭壇 4号	La Venta	Olmeca	×																		Stirling 1943, Pl.37
8		土器	Tlapacoya	Olmeca	×																		Joralemon 1971, Fig.122
9		壁画 A	Oxtotitlan	Olmeca	×																		Grove 1968b, Foto.16
10		壁画 1号	Oxtotitlan	Olmeca																			Grove 1968b, Foto.13
11		石碑 4号	Izapa	Izapa																			Quirarte 1977, Fig.10.5-a
12		石碑 2号	Izapa	Izapa																			Miles 1965, Fig.6-c

表IX

シンボル	資 料	出 土 地	様 式	関連図像										付 帯 箇 所										文 献			
				F	R	A	C	H	HE	EA	CO	PE	BE	AP	FO	SU	PU	NO	MO	LM	WI	CB	OT				
1	石碑2号 	Izapa	Izapa																								Miles 1965, Fig.6-a
2	土 器 	Kaminaljuyú	Maya (Esperanza)																								Kidder et al 1946, Fig.97-a
3	石碑11号 	Kaminaljuyú	Izapa (Miraflores)																								Miles 1965, Fig.15-a
4	石 偶 	La Venta	Olmeca																								Drucker et al 1959, Fig.64
5	石彫1号 	Laguna de los Cerros	Olmeca																								Bernal 1969, Pl.12
6	石 斧 	UN	Olmeca																								Covarruvias 1957, Pl.XI
7	土 器 	Tlapacoya	Olmeca																								Porter W. 1967, Fig.3
8	祭壇4号 	La Venta	Olmeca																								Stirling 1943, Pl.37 Schávelzon 1980, Fig.2
9	石 偶 	Las Limas	Olmeca																								Joralemon 1971, Fig.10
10	石 斧 	La Venta	Olmeca																								Drucker et al. 1959, Pl.25
11	装身具 	UN	Olmeca																								Joralemon 1971, Fig.30
12	浮き彫り 	Chalcatzingo	Olmeca																								Coe 1965a, Fig.10

〈メソアメリカに於けるシンボルの諸体系〉

表X

シンボル	資料	出土地	様式	関連図像										付帯箇所										文献
				F	R	A	C	H	HE	EA	CO	PE	BE	AP	FO	SU	PU	NO	MOL	M	WI	CB	OT	
1	石彫52号 	San Lorenzo	Olmeca	×					×														Joralemon 1971, Fig.211	
2	石製品 	Tlacoatepec	Olmeca	×					×														Coe 1965a, Fig.4	
3	岩絵 	Las Victorias	Olmeca					×														×	Boggs 1950, Fig.1	
4	岩絵 	Las Victorias	Olmeca					×														×	Idem. Fig.1	
5	壁画1号 	Oxotitlan	Olmeca					×														×	Grove 1969, Fig.2	
6	石偶 	San Cristobal	Olmeca						×													×	Coe 1965c, Fig.8	
7	石偶 	UN	Olmeca						×													×	Piña Chan and Covarrubias 1964, Fig.21	
8	仮面 	Mixteca, Oaxaca	Olmeca	×																			Covarrubias 1946a, Fig.7	
9	石偶 	Las Limas	Olmeca						×													×	Coe 1972, Fig.2 Joralemon 1971, Fig.10	
10	石斧 	Simojovel	Olmeca																			×	Covarrubias 1957, Fig.30 Kubler 1962, Pl.27	
11	石碑 	Alvarado	Olmeca						×														×	Stirling 1965, Fig.18-b, Covarrubias 1957, Fig.29
12	石碑 	Tepetlachco	Olmeca						×														×	Jimenes 1970, Fig.81

〈メソアメリカに於けるシンボルの諸体系〉

表Ⅶ

	シンボル	資料	出土地	様式	関連図像												付帶箇所	文献							
					F	R	A	C	H	HE	EA	CO	PE	BE	AP	FO			SU	PU	NO	MO	LM	WI	CB
1		石斧	UN	Olmeca	×																				Joralemon 1971, Fig.33
2		石製品	La Venta	Olmeca		×																			Drucker 1952, Fig.28
3		石斧	Tlaticó	Olmeca	×				×																Joralemon 1971, Fig.34
4		石斧	UN	Olmeca				×	×																Coe 1965c, Fig.18
5		仮面	Veracruz	Olmeca	×																				Covarrubias 1957, Fig.22
6		土器	Monte Albán	Zapoteca	×																				Paddock 1970, Fig.5
7		石碑	Monte Albán	Zapoteca	?																				Caso 1965b, Fig.7
8		土器	Monte Albán	Zapoteca	×																				Leigh 1970, Fig.2
9		石碑	Monte Albán	Zapoteca	?																				Idem. Fig.10
10		土器	Monte Albán	Zapoteca																					Paddock 1970, Fig.21
11		土器	Monte Albán	Zapoteca	×																				Leigh 1970, Fig.28
12		石碑10号	Kaminaljuyú	Izapa (Miraflores)																					Bernal 1969, Fig.41 Miles 1965, Fig.13

表 XIII

	シンボル	資 料	出 土 地	様 式	関連图像		付 帶 箇 所										文 献							
					F	R A C	H	HE	EA	CO	PE	BE	AP	FO	SU	PU		NO	MOL	MI	CB	OT		
1		骨 器	Chiapa de Corzo	Izapa			×																	Agrinier 1960, Fig.9, Lowe and Mason 1965, Fig.21
2		土 器	Kaminajuyú	Izapa																				Kidder et al 1946, Fig.186-a
3		土 器	Monte Albán	Zapoteca	×																			Paddock 1970, Fig.103
4		土 器	Zegache	Zapoteca																				Paddock 1970, Fig.21 Bernal 1969, Pl.77-b
5		石彫 I 号	Copan	Maya																				Maudslay I, Pl.63
6		石彫 I 号	Copan	Maya																				Idem. Pl.63
7		象形文字 (B神)	Dresden Codex	Maya																				Thompson 1971, Fig.12-11 Dresden, 43C
8		土 器	Monte Albán	Zapoteca																				Leigh 1970, Fig.14
9		石 碑 (絵文字C)	Monte Albán	Zapoteca																				Caso 1965b, Fig.8-c
10		土 器	Monte Albán	Zapoteca																				Paddock 1970, Fig.116
11		土 器	Monte Albán	Zapoteca																				Idem. Fig.131
12		石 碑	Monte Albán	Zapoteca																				Caso 1965b, Fig.15

＜メソアメリカに於けるシンボルの諸体系＞

表 XIV

シンボル	資 料	出 土 地	様 式	関連図像												文 献							
				F	R	A	C	H	HE	EA	CO	PE	BE	AP	FO		SU	PU	NO	MOL	MI	CB	OT
	石 碑	Monte Albán	Zapoteca	×	×																		Caso 1956b, Fig.15
	土 器	Monte Albán	Zapoteca	×											×								Caso 1965a, Fig.12
	土 器	Yagul	Zapoteca	×											×								Bernal 1969, Pl.71-a
	石 碑 (絵文字の部分)	Monte Albán	Zapoteca	?																		×	Caso 1965b, Fig.16
	石碑12号	Izapa	Izapa	×					×														Miles 1965, Fig.9-c
	石碑41号	Monte Albán	Zapoteca	×											×								Caso 1965a, Fig.8
	石碑1号	Izapa	Izapa	×										×									Miles 1965, Fig.2-g
	土 偶	Monte Albán	Zapoteca							×													Paddock 1970, Fig.151
	土 偶	Monte Albán	Zapoteca							×													Idem. Fig.140
	石 碑	Monte Albán	Zapoteca	×																			Covarrubias 1957, Fig.65
	石 偶	Monte Albán	Zapoteca	×																			Caso 1965a, Fig.13
	石 碑 (絵文字の部分)	Monte Albán	Zapoteca	?																			Caso 1965b, Fig.16

表 XV

	シンボル	資料	出土地	様式	関連図像										付帯箇所										文献	
					F	R	A	C	H	HE	EA	CO	PE	BE	AP	FO	SU	PU	NO	MOL	MI	CB	OT			
1		T-517* (象形文字の階段)	Copan	Maya																						Thompson 1962, Pl.119
2		T-772 (ライデン碑板)	UN	Maya																						Idem. P.370
3		石頭像 (遺構1)	Quirigua	Maya																						Covarrubias 1957, Fig.100 中央
4		石碑B号	Copan	Maya																						Idem. Fig.100 右下
5		石彫P号	Quirigua	Maya																						Kubler 1969, Fig.18-b
6		石彫P号	Quirigua	Maya																						Idem. Fig.18-b
7		祭壇M号	Copan	Maya																						Thompson 1971, Fig.15-12
8		石碑1号	Bonampak	Maya																						Mathew 1978, Fig.3
9		石碑H号	Copan	Maya																						Spinden 1957, Fig.70
10		神殿の銘板	Palenque	Maya																						Maudslay IV, Pl.76
11		T-563b	Madrid Codex Dresden Codex, etc.	Maya																						Thompson 1962, P.165
12		T-563b (火のシンボル)	Piedras Negras, Palenque, etc.	Maya																						Idem. P.183

※ Thompson (1962) の象形文字カタログ番号(以下同)。

〈メソアメリカに於けるシンボルの諸体系〉

表XVII






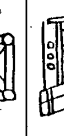






	シンボル	資料	出土地	様式	関連図像													文獻						
					F	R	A	C	H	HE	EA	CO	PE	BE	AP	FO	SU		PU	NO	MO	LM	WI	CB
1		石碑C号	Quiriguá	Maya	×																			Maudslay II, Pl.8
2		石碑I号	Copán	Maya	×		×														×			Maudslay I, Pl.63
3		石碑	Piedras Negras	Maya	×		×																	Thompson 1971, Fig.12-10
4		石彫P号	Quiriguá	Maya			×																	Kubler 1969, Fig.18-c
5		浮き彫り	Palengue	Maya			×																	Ruz 1958, Fig.18
6		石碑	Tikal	Maya			×																	Thompson 1971, Fig.20-10
7		T-551 (祭壇O号)	Quiriguá	Maya																				Idem. Fig.16-5 Thompson 1962, P.165
8		T-757	Copán, Yaxchilán, Piedras Negras,etc.	Maya	×																			Idem. P.350
9		T-735 (カヤアの記号)	Dresden Codex, Madrid. Codex.	Maya																				Idem. P.314
10		楣25号	Yaxchilán	Maya																				Kubler 1969, Fig.64
11		楣25号	Yaxchilán	Maya																				Idem. Fig.64
12		神殿の銘板	Palenque	Maya																				Maudslay IV, Pl.81

表 XVII

シンボル	資料	出土地	様式	関連図像												文獻								
				F	R	A	C	H	HE	EA	CO	PE	BE	AP	FO		SU	PU	NO	MO	LM	WI	CB	OT
	象形文字	Dresden Codex	Maya																					Thompson 1971, Fig.41-64 Dresden, 31c
	石碑7号	Yaxchilán	Maya	×				×											×					Thompson 1971, Fig.44-3
	石彫P号	Quiriguá	Maya					×																Idem. Fig.44-4
	T-503	Palenque, Yaxchilán, Quiriguá, etc.	Maya																				×	Thompson 1962, P.98
	石棺の 浮き彫り	Palenque	Maya																					Ruz 1958, Fig.13
	石棺の 浮き彫り	Palenque	Maya																					Idem. Fig.18
	石碑C号	Quiriguá	Maya	×																			×	Maudslay II, Pl.20
	石碑H号	Copán	Maya																					Robicsek 1975, Fig.148
	石碑	Copán	Maya	×																				Spinden 1957, Fig.43-g
	T-544	Yaxchilán, Xcalum, Seibal, etc.	Maya																					Thompson 1962, P.155
	浮き彫り	Palenque	Maya																					Maudslay IV, Pl.10
	T-546	Palenque, Yaxchilán, Piedras Negras, etc.	Maya																					Thompson 1962, P.160

〈メソアメリカに於けるシンボルの諸体系〉

表 XVIII

	シンボル	資料	出土地	様式	関連図像													文献						
					F	R	A	C	H	HE	EA	CO	PE	BE	AP	FO	SU		PU	NO	M	L	W	CB
1		絵 図	Dresden Codex	Maya	×																			Dresden, 26b Robicsek, 1975, Fig.130
2		T-732 (キン記号)	Carcha, Chajcar	Maya																				Thompson 1962, P.312
3		T-578	Seibal, Tikal, Uaxactun, Piedras Negras, etc.	Maya																				Idem. P.204
4		T-575	Naranjo, Palenque, Copán, Uaxactun, etc.	Maya																				Idem. P.201
5		T-511 (ムルクの記号)	Yaxchilan, Bonampak, Naranjo, etc.	Maya																				Idem. P.110
6		T-582 (モルの記号)	Uaxactun, Tonina, Pusilhua, etc.	Maya																				Idem. P.207
7		T-581 (モルの記号)	Acanceh, Chama, Copán, Dresden, etc.	Maya																				Idem. P.207
8		T-508 (チクチャヤンの 記号)	Naranjo, Mountain Cow, etc.	Maya																				Idem. P.107
9		象形文字 (チクチャヤンの 記号)	Copán	Maya																				Thompson 1971, Fig.7-8
10		T-510a (ラムトの記号)	Copán, Etzna, Naachtun, Palenque, etc.	Maya																				Thompson 1962, P.108
11		T-510b (ラムトの記号)	Copán, Quirigua Yaxchilan, Xcalum, etc.	Maya																				Idem. P.108
12		T-510c (ラムトの記号)	Copán, Quirigua Naranjo, Etzna, etc.	Maya																				Idem. P.108

